

乃牧之撰

京水百鶴画

京山人百樹刑定

北越雪譜

初編
三卷

東京書肆

萬竹閣梓

北越雪譜敘

世之農商而嗜文雅者或不知所以文雅為文雅徒企羨韻士墨客之風標沈酣文酒流連去月而置生計於不問以傾產業者間亦有之是豈嗜文雅罪哉其人特自取之耳矣鈴木牧之翁者北越塩澤之老農也性嗜文雅而能尚節儉抑賭博不務誦讀於經營之中而務鈔槩於會計之餘以交遠近之墨客嘗以堪忍之二字

京水百篇

京山人百樹

北越雪譜

初編
三卷

東京書肆

萬竹閣梓

北越雪譜敘

世有農商而嗜文雅者或不知取以文雅為文
推從全羨韻士墨客之同標沈酣文酒流連至

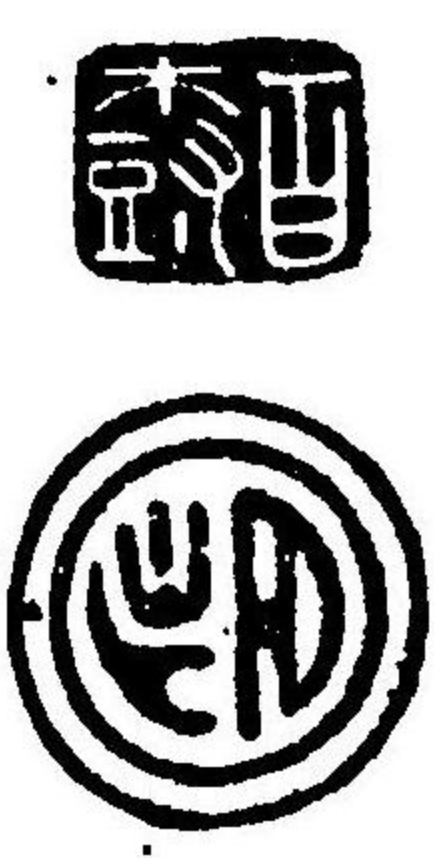
月而置生計於不問以傾產業者間亦有之是
豈嗜文雅罪哉其人特自取之耳矣鈴米牧之
翁者北越塩澤之老農也性嗜文雅而能尚節
儉抑驕惰不務誦讀於經營之中而務鈔槧於
會計之餘以交遠近之墨客嘗以堪忍之二

銘自守以故其名久布遠邑石生業亦因以致
豐饒矣嗚呼若翁者不徇文雅之名而能務其
實者非耶余於公初得一面識於江戶而後持以
書訂交者有年于此今茲乙未遠寄示其所著
北越雪譜者六卷併囑以校訂時方盛夏炎威
如燬乃就小窗下試繙尋閱之則越雪恍如耳
聞騷屑之聲目見紛霏之影使人頓忘甌中之
茗讀到積疊埋屋行旅不通人以窮乏柴米或

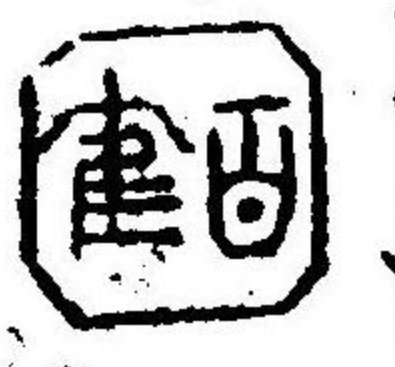
不給則澶然寒顫肌膚为之粟生矣余因以謂
紈袴輕薄子弟當微雪俄下紛之舞空之際彫
鞍寶勒飛玉塵於郊坰或纒帽棕鞋踏瓊瑤於
街衢或重舸載妓或高樓呼酒直以爲勝遊樂
事曾不知飢寒由何物若令其人讀此書依以
想其種之凍餒之苦狀子然則安事不有能有
怪非宴安之公共而威之爲生戒懼之心者哉
寧梓弓行之至有裨益世教蓋非鮮小也聞者

稍得秋涼聊削之駁難校訂方畢者三卷書賈
 文溪堂見而喜之謀梓以之レ余寄筒以告翁
 曰雪中尚尸漫筆豈敢效梓耶於是予不復俟請
 之於翁奉以付之翁之嗜文雅而能發其實以
 必笑領之而已翁之稿本國字之間濫字者嘗
 不添音訓之假名余今盡添之以便童蒙ニ爾
 天保六年乙未秋國菊開日

江戸 京山人百樹并書



此書の稿本國ハ別冊トシ或ハ其説ハ大圖ヲ描キテ添ふるトあり
 皆牧之翁ガ自筆ノ草画也此筆梓行ノ為ニせしむルニ圖ハ
 涉穢重複あり今梓ハ臨テその圖ノ過半以省キ目以新ニ
 考ルルを存シテ卷中ニ夾刺考ハ單冊トスルニ難ク以テ也則ハ
 是刪定ノ考ニ係ル所也余嘗テ原圖以瀆キテ雪中ノ稿狀
 混錯を走墨ニ失テ通曉ニ難キカレ靴中ノ倉庫ニ置テ何如
 克惟翁ガ草圖ハ假ビテ喜テ描ケル而已或原圖ノ梓ト入ルルハ則
 此我加テ或ハ説有テ圖考キカレ其説ニ據テ其圖改作シトモリ蓋余考
 越世改題テ越堂ノ真墨ヲ於テ茫然たり故ニ雪圖ト於テ違漏あり
 知ルル者其誤を編者ニ駁スルヲ勿シ 乙未秋 京水百鶴



掘除積雪之圖



枕間簾、
 雪華飛天
 曙空未白
 四圍烟絕
 蕪林人不見
 風濤撼徑犬
 空飢懶乘冷
 殘促方履屐
 拚老先集敵
 衣屋裡要知
 春未到牆頭
 三月早梅鮮
 右賦小越雪景

江戸 醉石山人 祿題

京水筆

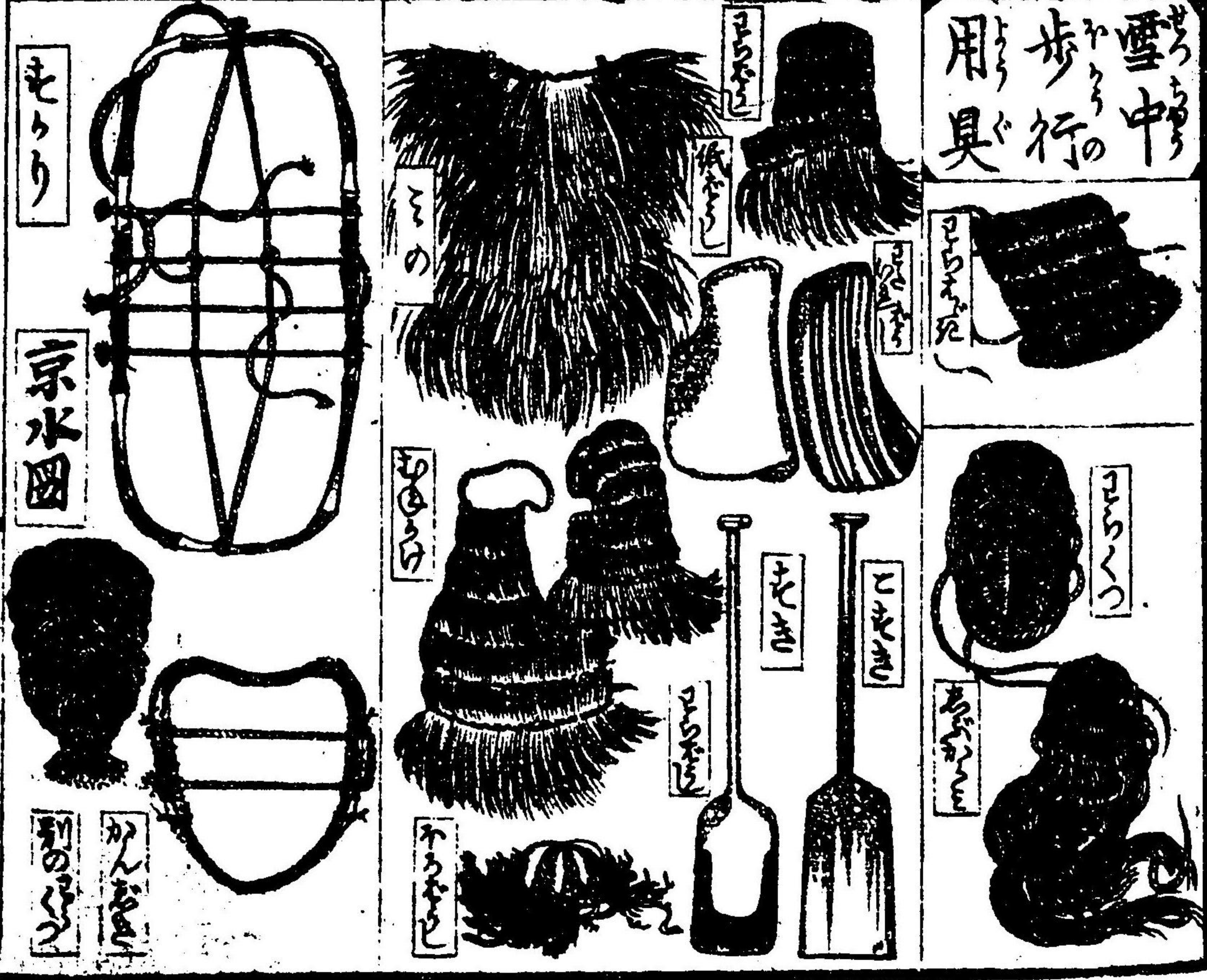


屋上雪掘圖



繩を穿て雪行圖

雪中歩行の用具

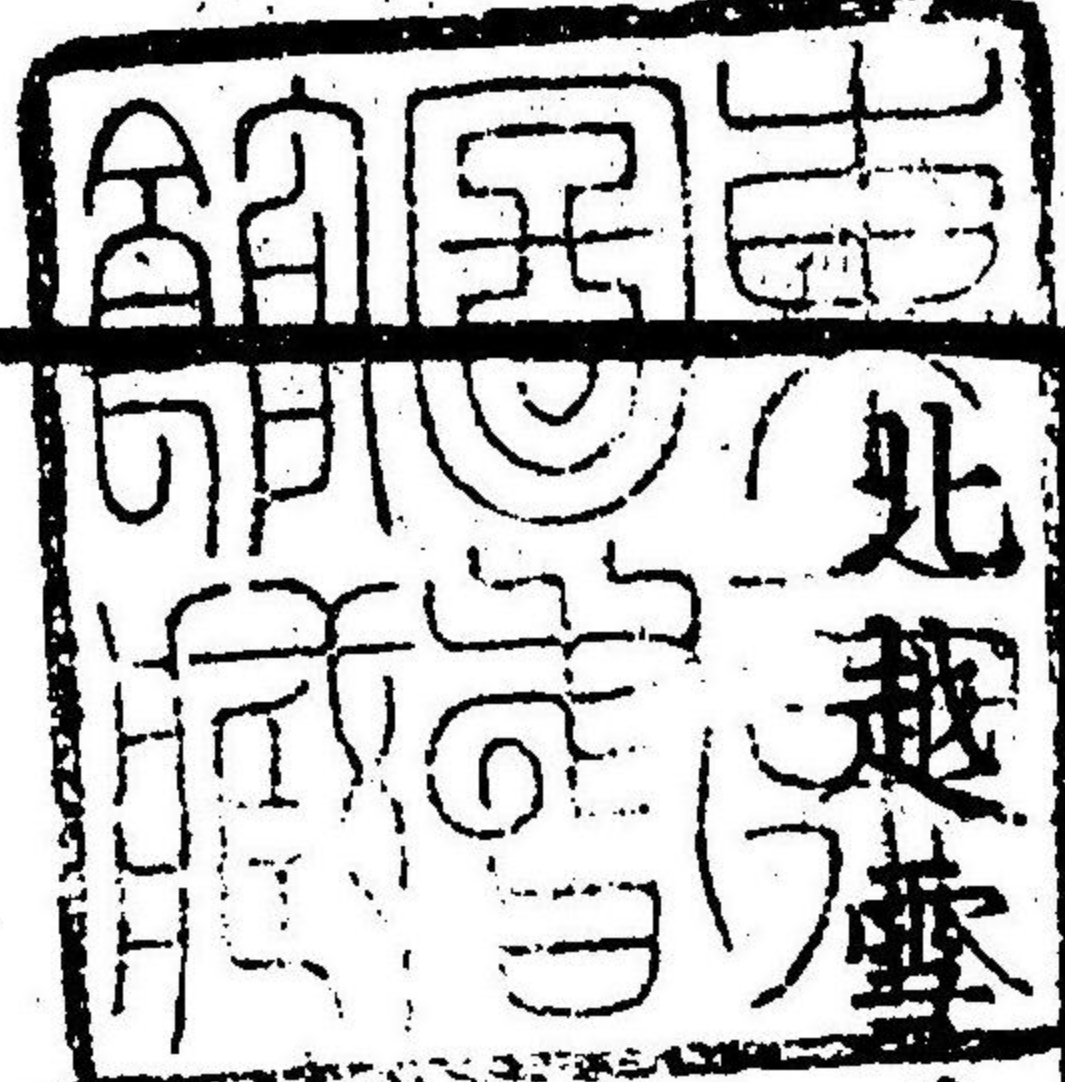


モクリ

京水圖

北越雪譜初編中下卷之上目錄

地氣雪と成る弁	雪の形状
雪の深淺	雪意
雪の用意	初雪
雪の堆量	雪竿
雪を拂ふ	沫雪
雪道	雪蟄
胎内潛	雪中の洪水
熊捕並白熊	熊人を助
雪中の氷	雪吹
雪中の火	破目山
雪顔	○通計二十一條



北越雪譜初編卷之上

越後塩澤 鈴木牧之 編撰

江戸 京山人百樹 刑定

○地氣雪と成る弁

凡天の形氣爲りて下す物。雨。雪。霰。霽。雹。露。ハ地氣の粒珠を所霜ハ地氣の凝結する所冷氣の強弱による其形を異ふもの。地氣天小上騰形を爲て雨。雪。霰。霽。雹。電。と成る。温氣をハ水と爲る水ハ地全體をハ元の地不飯りの地中深けに於て温氣あり地温の成得て氣成吐天小向上騰する人の氣息のどろく。昼夜庁時絶るふま。天も又氣成吐地不下す是天地の呼吸なり人の呼と吸とのごと。天地呼吸と萬物を生育之天地の呼吸常成失ふ時ハ暑寒時不應せ於大風大雨其餘さむぐの天覆あり天地の病と天小九ツの段のりてを九天と云九段の内最地不近き所を太陰天と云。地氣まき高きハ八段。太陰天と地との間ハ三ツの際

あり天小近を熱際との中を冷際との地小近を温際との地気は冷際を限りとし
 熱際小至らず冷温の二段の地を去るる甚く遠く富士山の温際を越て冷際
 小ちるる也也絶頂の温気通せざる由也草木を生ぜず夏も寒く雷鳴暴雨を温
 際の下小なる雷と云いさす此の雲は地中の温気より生ずる物也其起る形は
 湯気のゴト一水沸て湯気の起と同ト云ふも温気は以て天小升りかの冷
 際小の温気は温気消て雨とる湯気の冷て露とる如く冷際小の温気は雲を
 去て雨露の粒珠天地の気中不在も以て之草木の實の山成じりさるる気中不
 生むる由也云々冷際小の雨とるる時天寒甚く冷時雨氷の粒とあ
 りて降り下る天寒の強と弱とよよりて粒珠の大小を為す是を霰と雲とを
 電は夏の雨の弁也 地の寒強き時地気形はるるばる天小升る微温湯気のごと
 天の曇は是地気上騰と多けり天灰色を去りて雲とるるは曇るる雲冷
 際小到り先雨とる此時冷際の寒気雨氷と力たさるる由也花粉を為す

下は是雪と地寒のよと云ふことよと云ふよりて氷の厚と薄との如く天小温冷熱の三
 際あり人の肌は温小肉は冷小臟腑は熱をも同道理之気中萬物の生育悉く天
 地の気格小随ふも是余が發明小の事諸書小散見しる古人の説也

○雪の形

凡物を視る小眼力の限りのもの其外を視るるは人の肉眼を以て雪は
 一片の鷲毛のごとくも数十百片の雪花併合して一片の鷲毛を為す是を驗微
 鏡小照し視るる天造の細工なる雪の形状奇と妙とるる中下小圖を以て其形の
 齊くもるるかの冷際小於て雪とるる時冷際の気運はとるかゝる由也雪の形氣小應
 じて同くもるる也と云ふも肉眼のしかるる至微物也昨日の雪も今日の雪も一
 の白糝糊を為すとの下の圖は天保三年
 許鹿君の高撰雪花圖説小在る所雪花
 五十五品の内代勝寫も雪六出代為
 御説小曰凡物方體ハ必ハを
 以て一圓圖と山體ハ丸を六代以て一圓圖ハ定理中の定数無へり守云々雪を六

の花とのあす 御説を以てて 按ふ田ハ天の正東方ハ地の実位之天地の
 氣中ハ活動する方物悉く方田の形ハ失ふは其の所以ハ一ハ人の體方ハ一ハ
 方田ハ一ハ田ハ一ハ是天地方田の間ハ生育も亦天地の象然するも亦子
 の親ハ似るハ相同ト雪の六出する所以ハ物の眞長數ハ陰半數ハ陽ハ人の體男ハ
 陽半ハ九出ト 頭・兩耳・鼻・兩手 女ハ十出ト 兩乳・兩脚・九ハ半の陽ハ長の陰ハ
 且ハ陰陽和合ト人ハ爲カ男ハ無用の兩乳ハ女ハ陰ハ女ハ不用の
 陰舌ハ男ハ氣中ハ活動物此理ハ漏るるハ雪ハ活物ハ男ハ一ハ雪ハ活物ハ男ハ一ハ
 實ハ男ハ活動の氣ハ男ハ六出ト 形ハ陰中或陽ハ象ハ田形を具ト
 亦ハ水ハ極陰の物ト 滴ハ時ハ田形を具ト 亦ハ水ハ極陰の物ト 滴ハ時ハ田形を具ト
 崩ハ亦ハ陰ハ陽の田ト 天地氣中の機測定理定数ト
 奇ニ妙ニ愚筆ハ一ハ

○雪の深淺

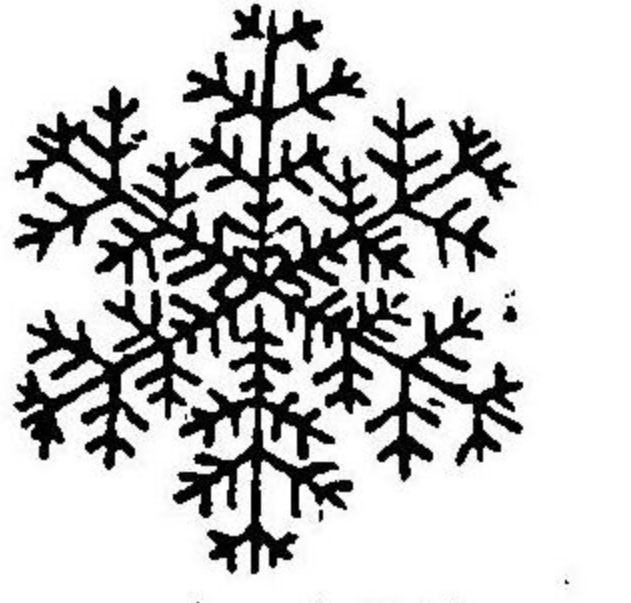
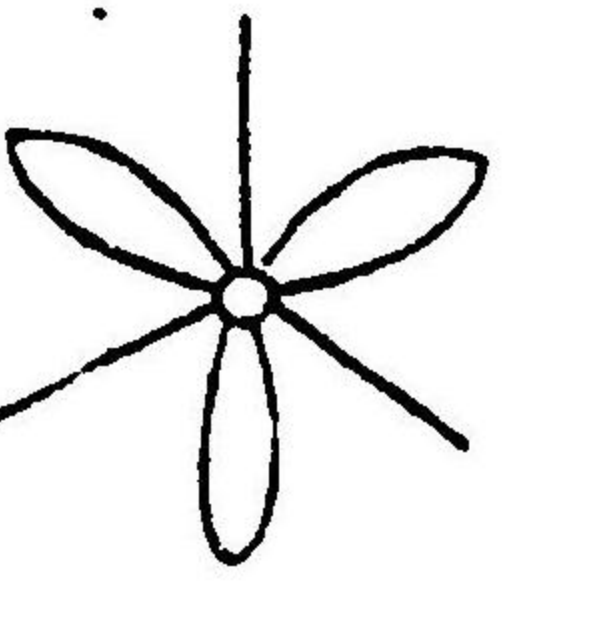
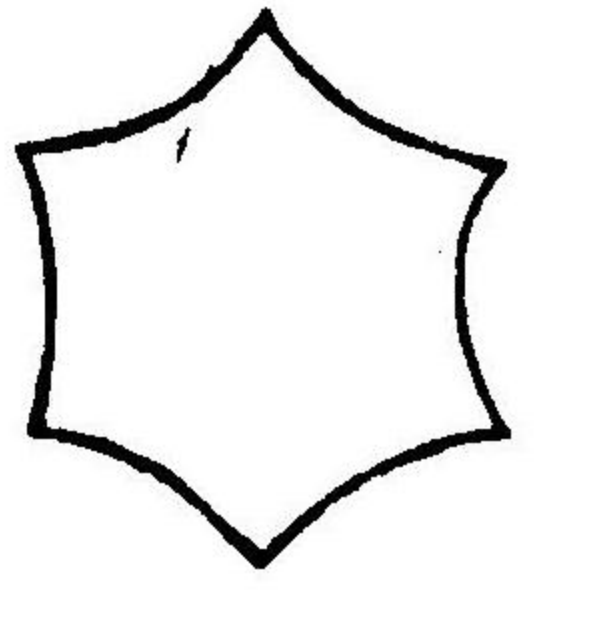
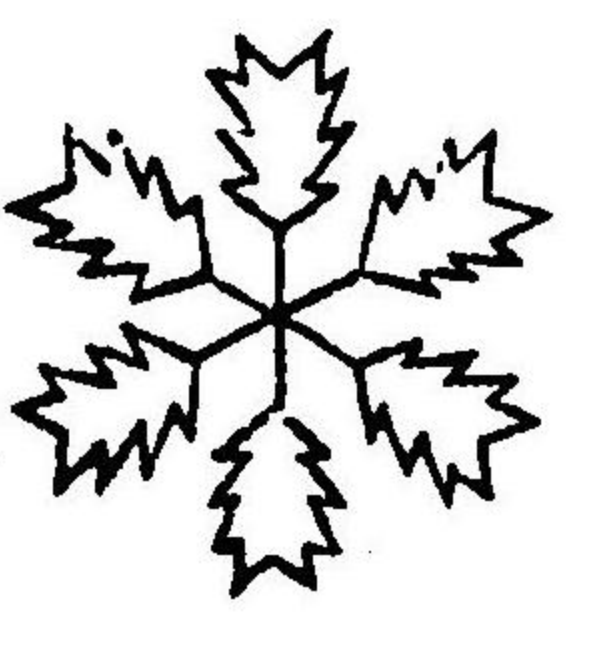
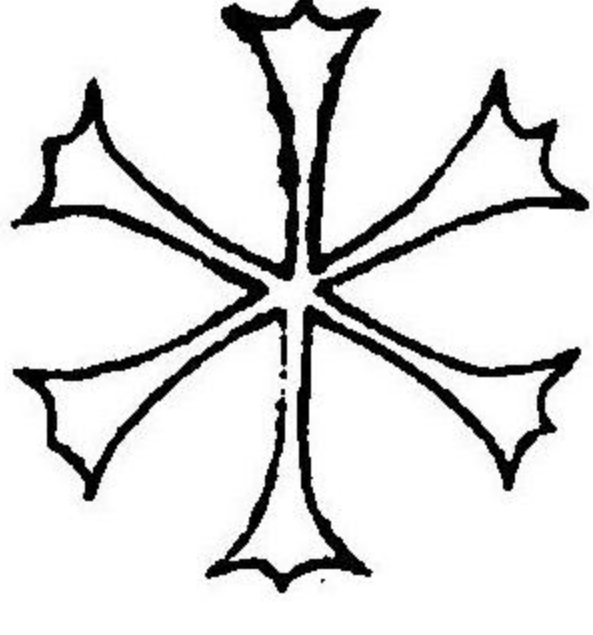
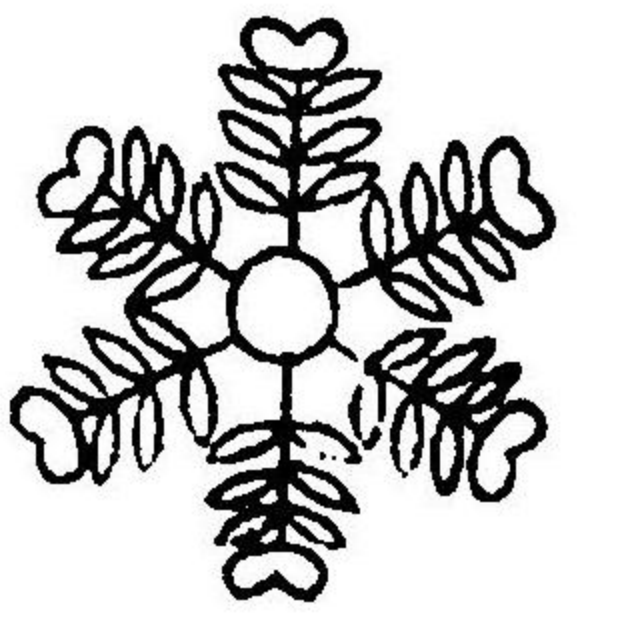
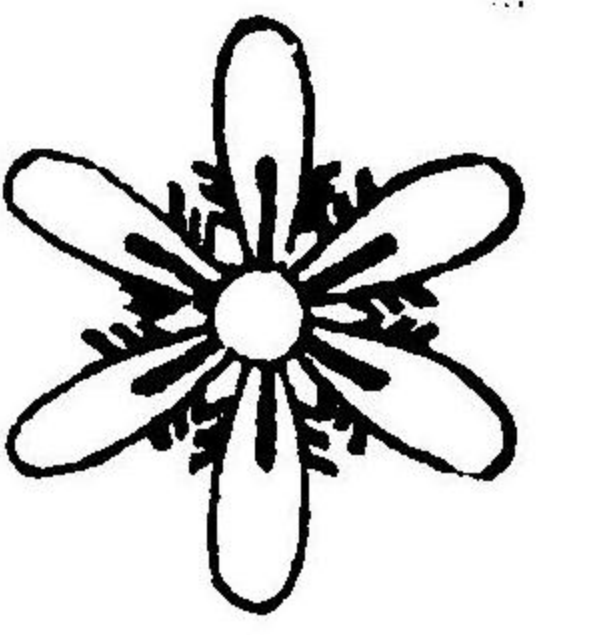
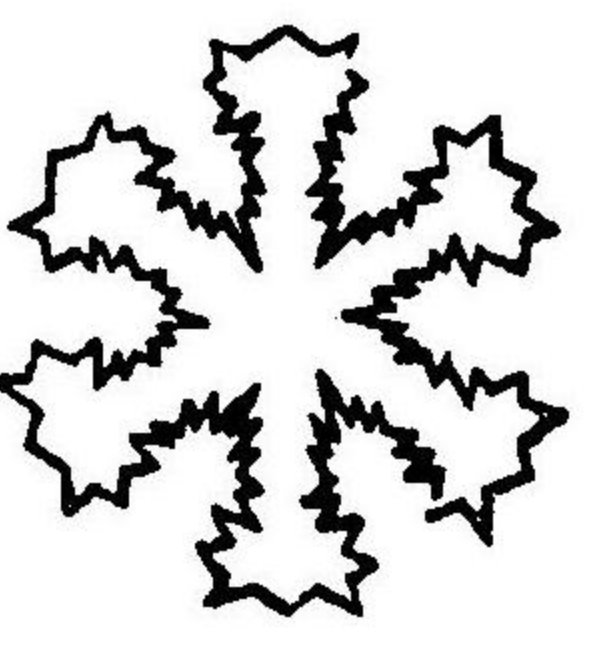
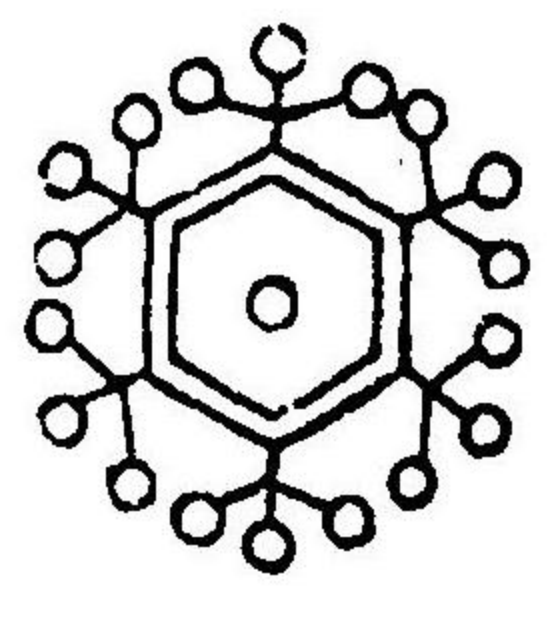
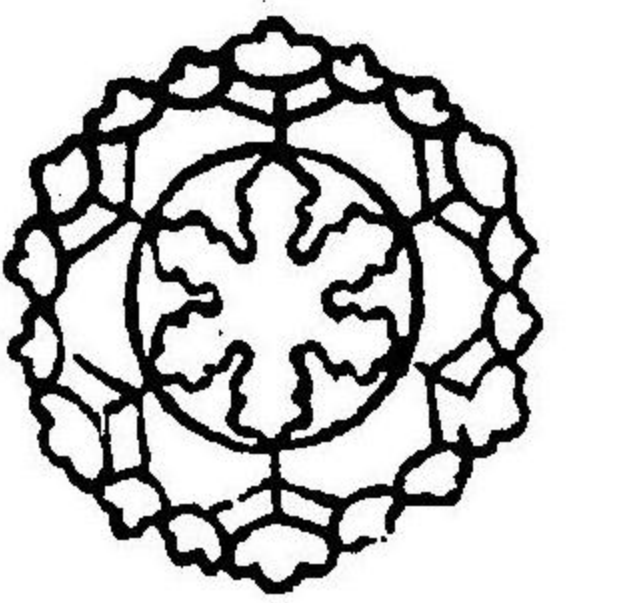
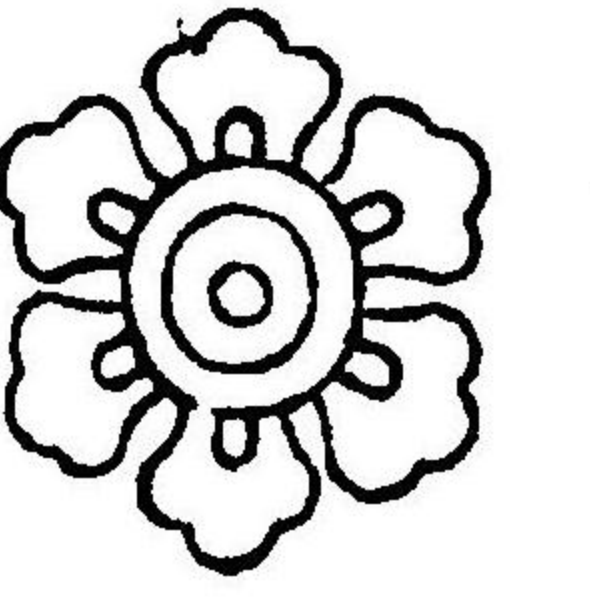
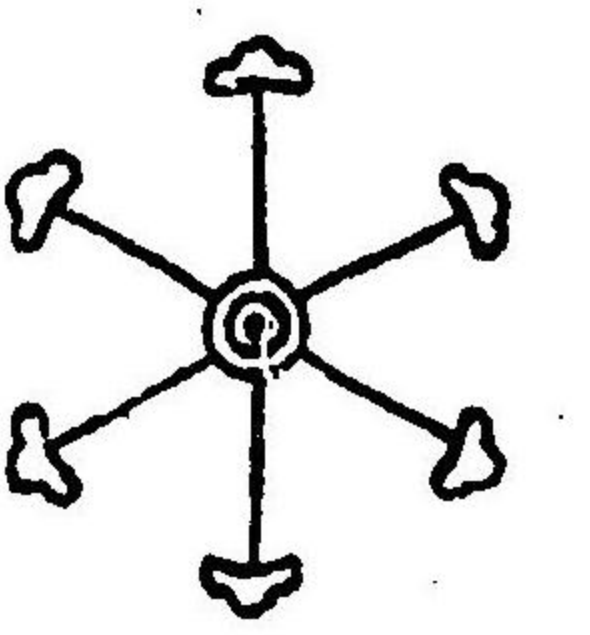
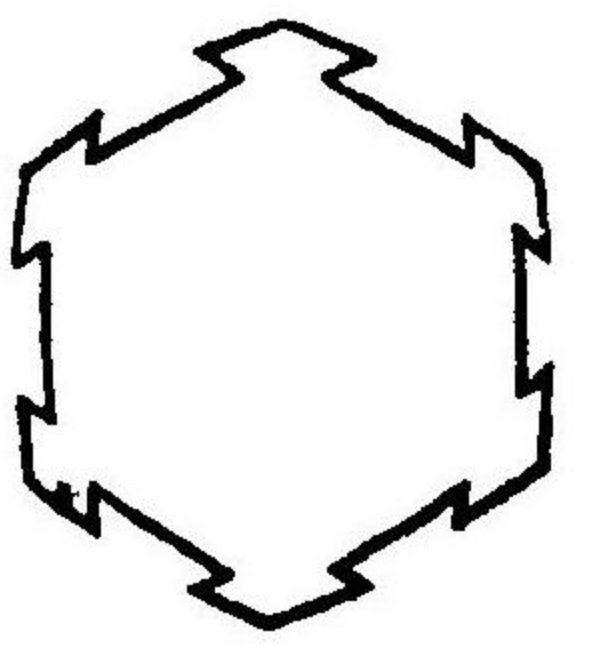
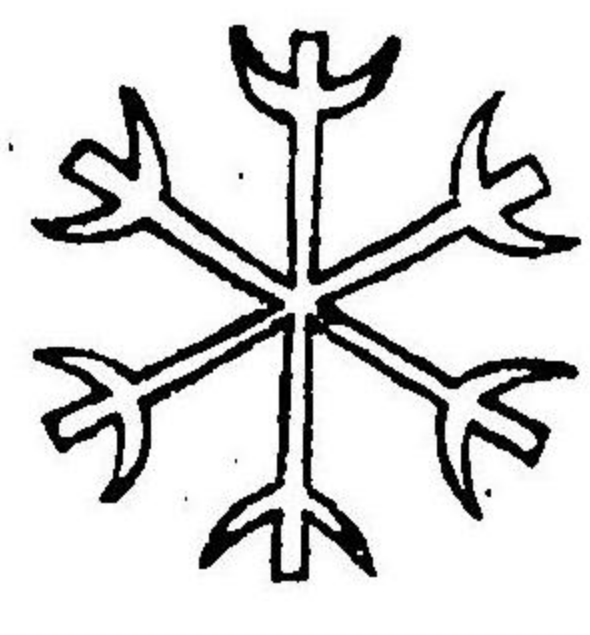
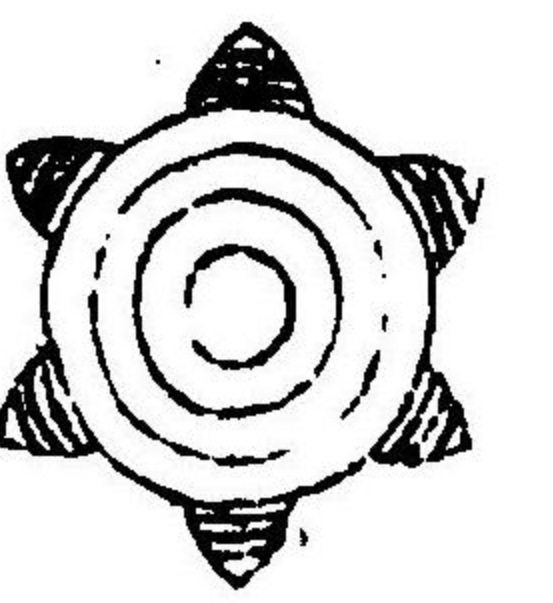
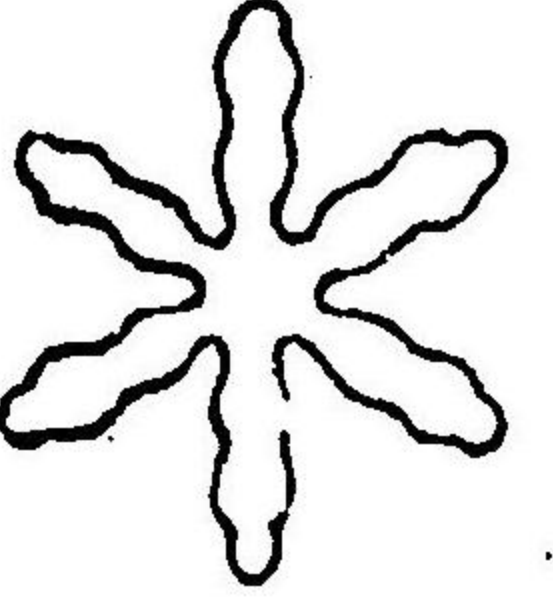
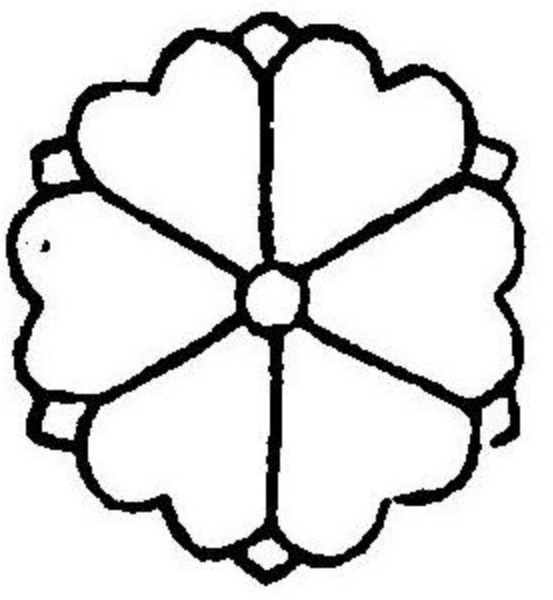
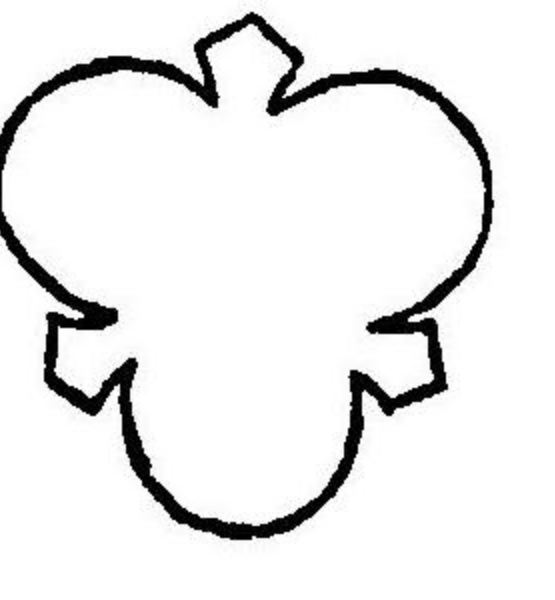
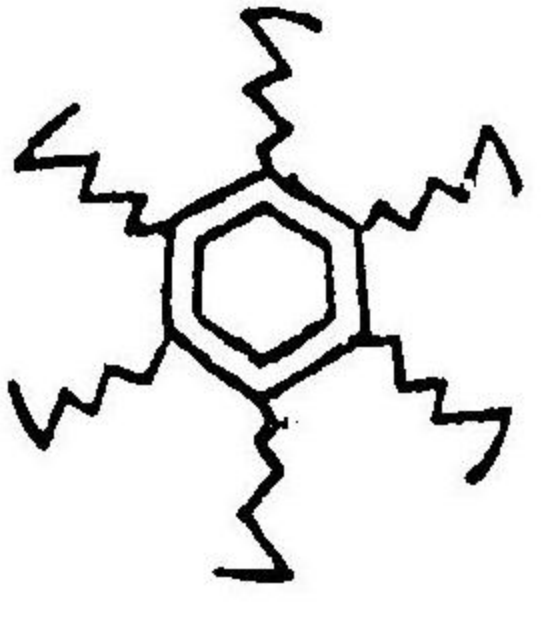
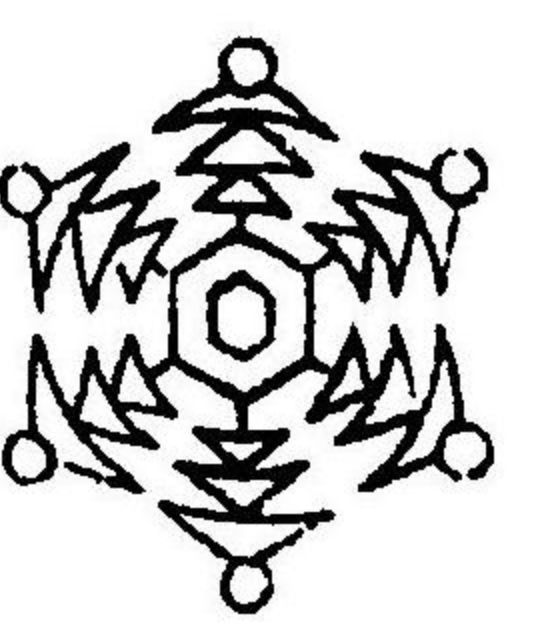
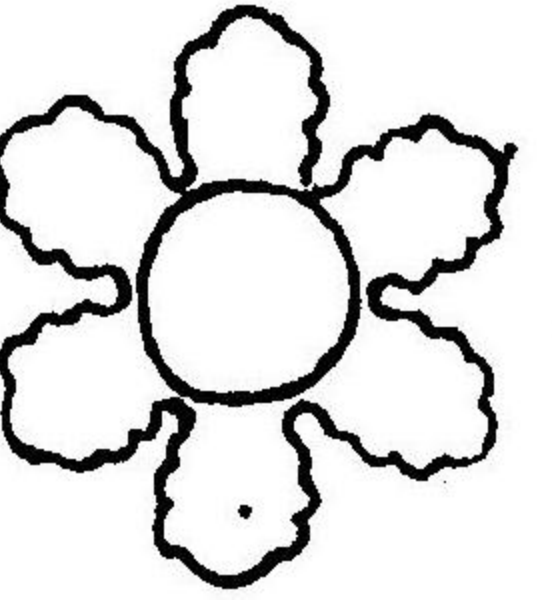
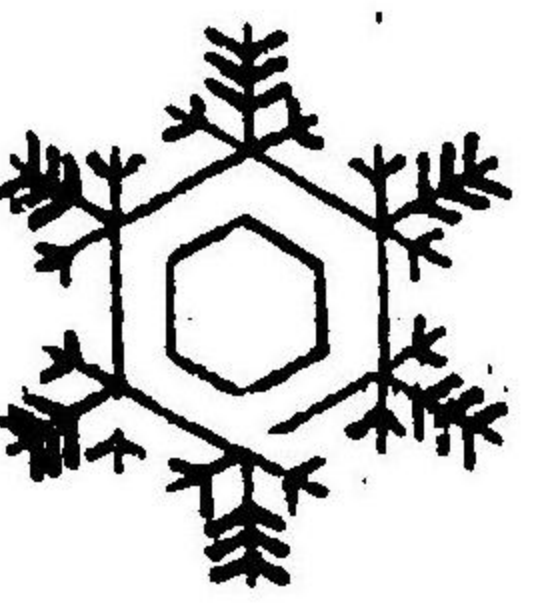
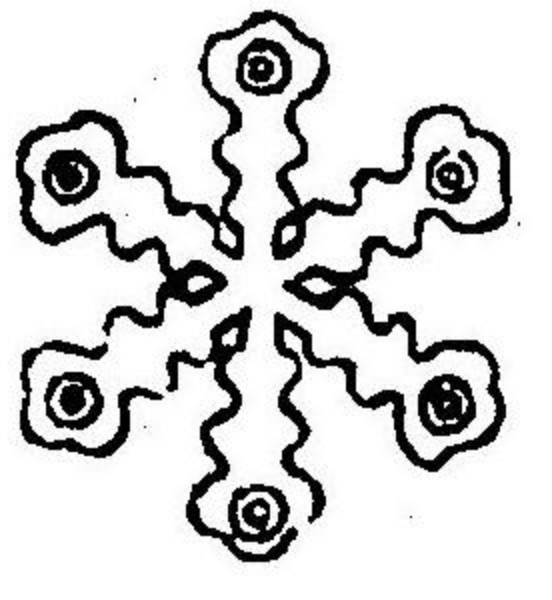
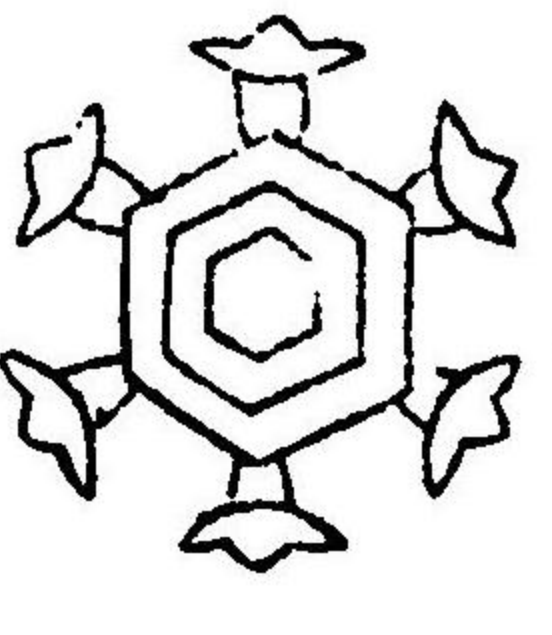
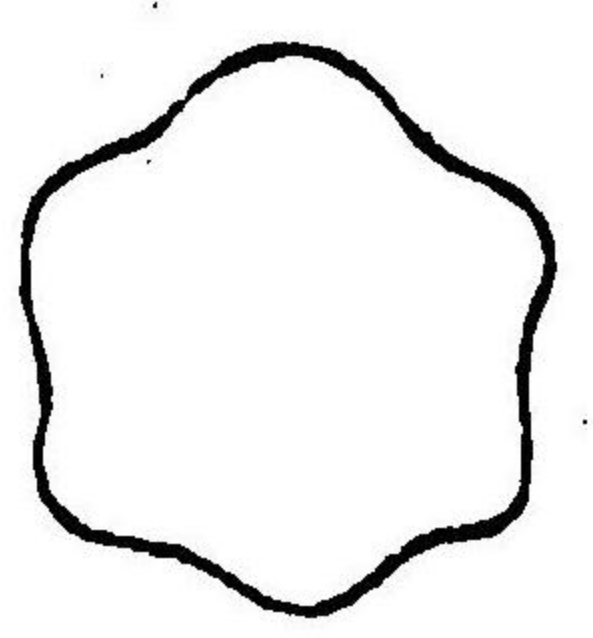
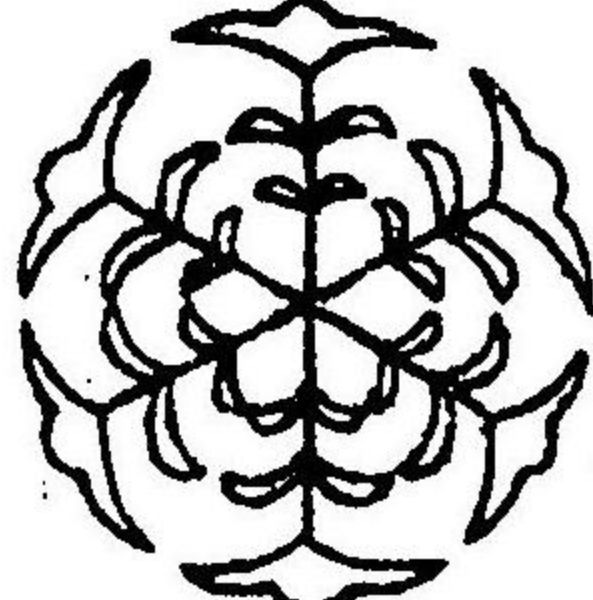
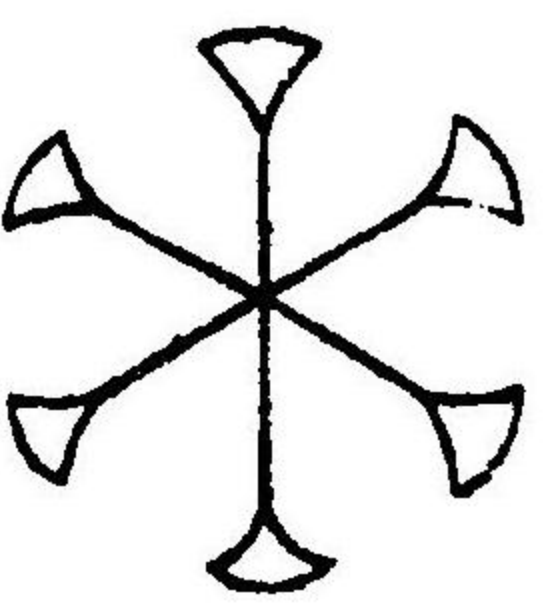
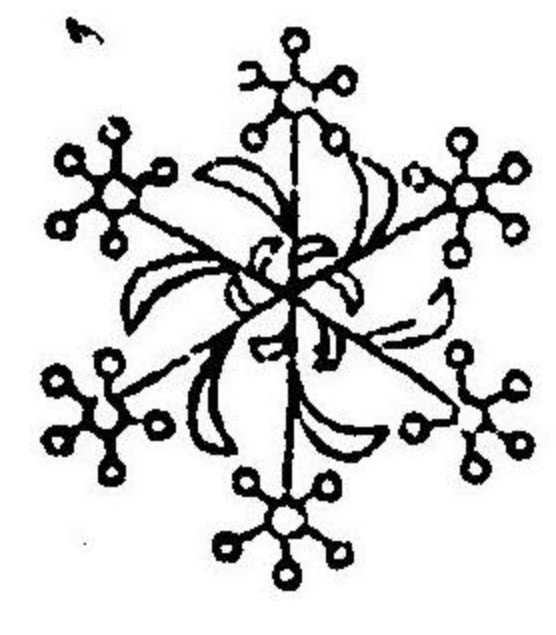
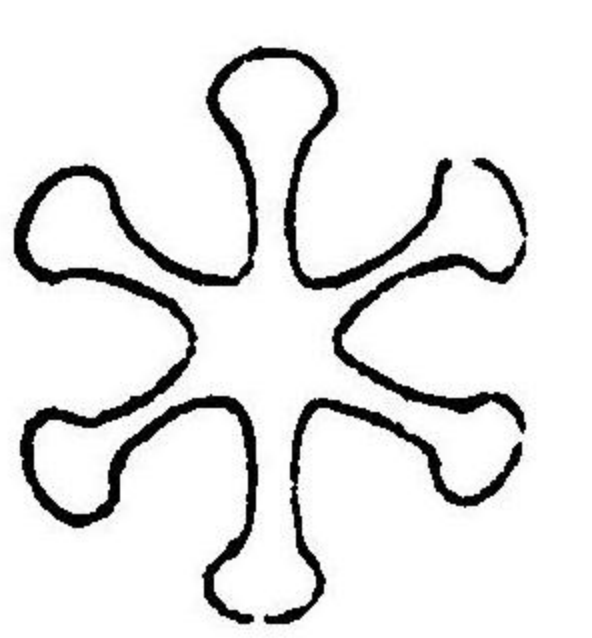
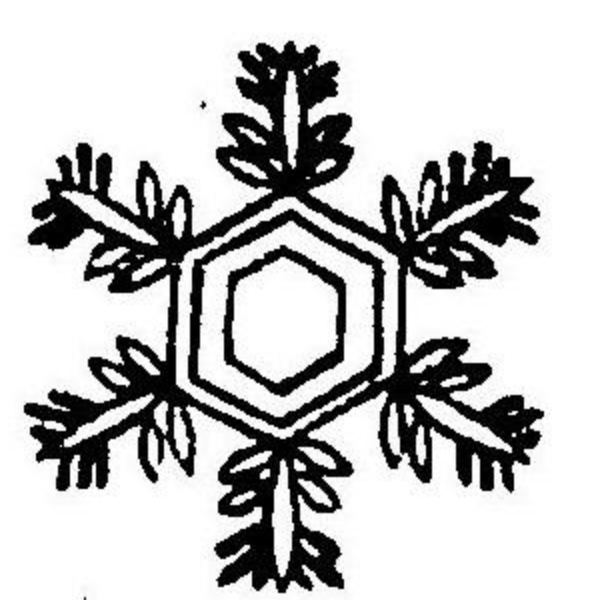
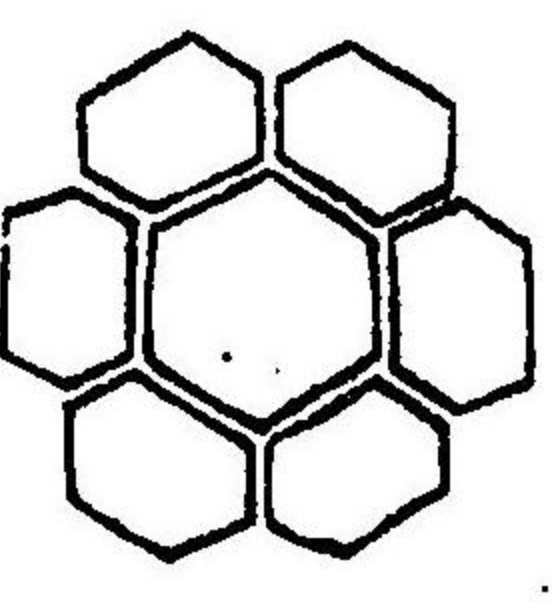
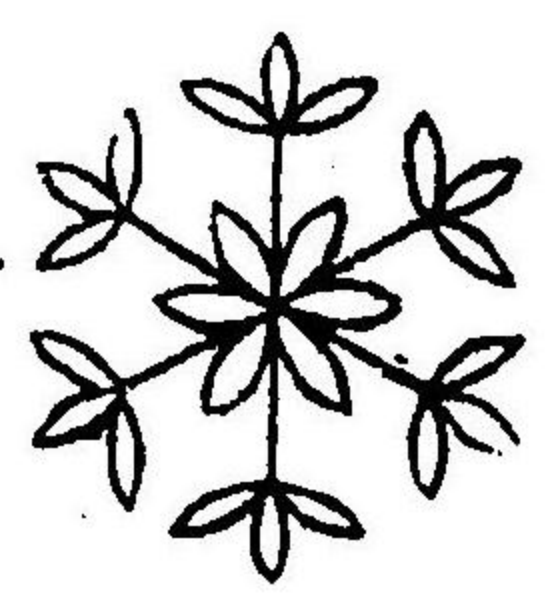
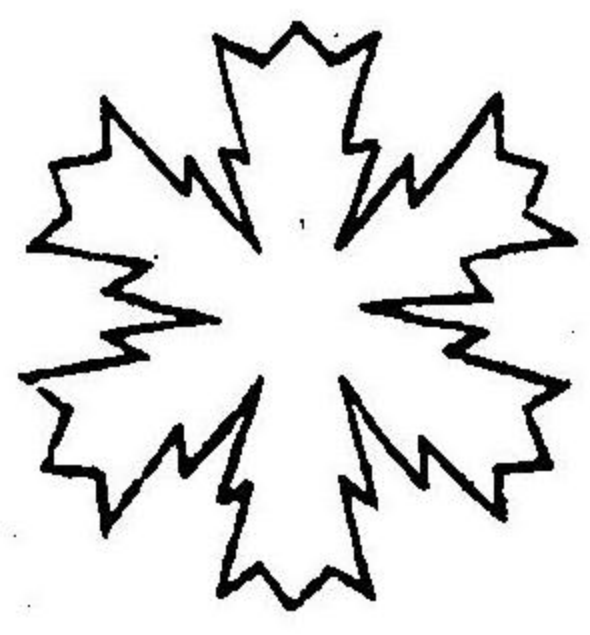
左傳ハ八年平地尺ハ盈を大雪ト爲ト見え其國暖地ト唐の韓愈ハ雪
 を豊年ハ嘉瑞ト云ハ 暖國の論ト唐土ハ寒國ハ八月雪降ル五雜
 組ハ 暖國の雪一尺以下ハ山川村里立地ハ銀世界ト云ハ 雪の飄ト翻ト
 たるを觀テ花ハ論ハ玉ハ比ハ勝望美景を愛ハ 酒食音律の樂を添ハ 画ハ寫ハ
 詞ハ 稱觀ハ 和漢古今の通例ト是雪の淺ト國の樂ト我越後
 のごとク年毎ハ幾丈の雪を視ハ何の樂ハ 雪の爲ハ力を尽ハ 財を
 費ハ 十辛万苦ト云ハ 下ハ説ク所を視ハ 雪の爲ハ力を尽ハ 財を

○雪意

我國の雪意ハ暖國ハ均ハ 九月の半ト霜を置テ寒氣次第ハ
 烈ク九月の末ハ至ハ 殺風肌を侵テ冬枯の諸木葉を落ハ 天色雲ト一ハ日の光
 看ガるハ 連日ハ是雪の意ハ 天氣驟臈ト云ハ 數日ハ一ハ遠近の高山ハ白を
 雪を觀セハ 又海ハ鳴リ山ハ 雪ハ

○驗微鏡を以て雪状を審み視る圖
 此圖の雪は國譯の高橋中少将時平十五郎の
 内は寫真とは是則に雪の舞入る時を以て
 紅毛の雪の舞入る時を以て物の中は高橋中少
 将の雪の舞入る時を以て物の中は高橋中少

天機元々百花中六出奇葩別示工
 譯雪言著寫花冊或抽珍圖序
 高風 類雪花園 枚之四



其年の氣運寒暖はついで均くはなり初雪は九月の末十月の首あり
我國の雪は舊毛をうらみ降時うらみは粉砕をる風又を助く故に一晝夜
積貯六七尺より一丈ふ至る時あり往古より今年ふらむ心此雪此国小降る事
るにまじげ暖国の人のごとく初雪を觀て吟詠遊興のふらむ夢ゆもあらず今年
又此雪中ふ存る事か雪は悲は邊郷の寒國小生る不幸なり雪を觀て樂む
人の數は花の暖地小生る天幸を羨みんや

○雪の堆量

余が隣宿六日町の俳友天吉老人の語小妻有庄小むらび一頃園ふ千隈川の邊の雅
人初雪より天保五年十二月廿五日までの間雪の下る毎小用意ある所の雪を尺をりて
量りし初雪の高さ十八丈ありしこと此語雪國の入る信にぞくも人もつ
らく思量小十月の初雪より十一月廿五日まをその日數八十日の間小五天づの雪を尺
四丈ふらむを隨て下は隨て掃ふ処は積るる事又地小むら減る事

かきとめて是をちりて我國の深山幽谷雪の深きよりあましく天保五年ハ我國
近年の大雪なりし由も右の註述ふらむ

○雪竿

高田御城大手先の廣場小木を方小削り尺を記して建のふ是を雪竿とて長二丈と
雪の深淺公税小係るを以て多し高田の俳友楓石子よりの春輪小天保五年の仲冬雪竿を
尺を當地の雪比節一丈小餘りしこと以末より雪竿とてを越後の事として佛
句ゆもええこと此国小於て高田の外无用の雪竿を建る処昔はあらず今ハ風
雅を以て我國小遊入雪中を避て三夏の頃此地を踏む越路の雪をさる然る小
越路の雪を言の葉小作意ゆたがらむものハ我國のこも其ふらむ

○雪を掃ふ

雪を掃ふ落花をそらふ對と風雅の事と和漢の吟味の事とをええこと
かゝる大雪をそらふ風雅の状あり初雪の積りしをそのまふけは再び下る

雪を添へて一寸の雪を二度降し二度掃ふの雪を思言ふ雪掃ふの
 土を掃ふとくさるも多し斯くの掃ふ家の用路を寒く人家を埋へ人の出さぬ
 もろく力強家の幾万斤の雪の重量を推碎んを、さうも家とて雪を掃ふ
 る一掃ふ木を作りし鋤を用ふ里言ふと、則木鋤と掃ふの木をりて
 作る木質輕強と折らざる且輕形ハ鋤不似て又廣一雪中第一の用具
 山中の人をを作りて里小賣家毎小野を、雪を掃ふ状態ハ固ふ、
 如く掃ふ雪ハ空地の人小妨に、山の積上り、里言ふ掃揚と、
 一家夫を、七カ、掃夫を備へ幾十人の力を併て一時ハ掃夫を急小為
 ま、掃内、大雪下、地小堆、人カ、
 る、小家の、掃夫を、
 雪、
 り、
 時、

を低て敷息を、大低雪、
 一掃揚二番掃、

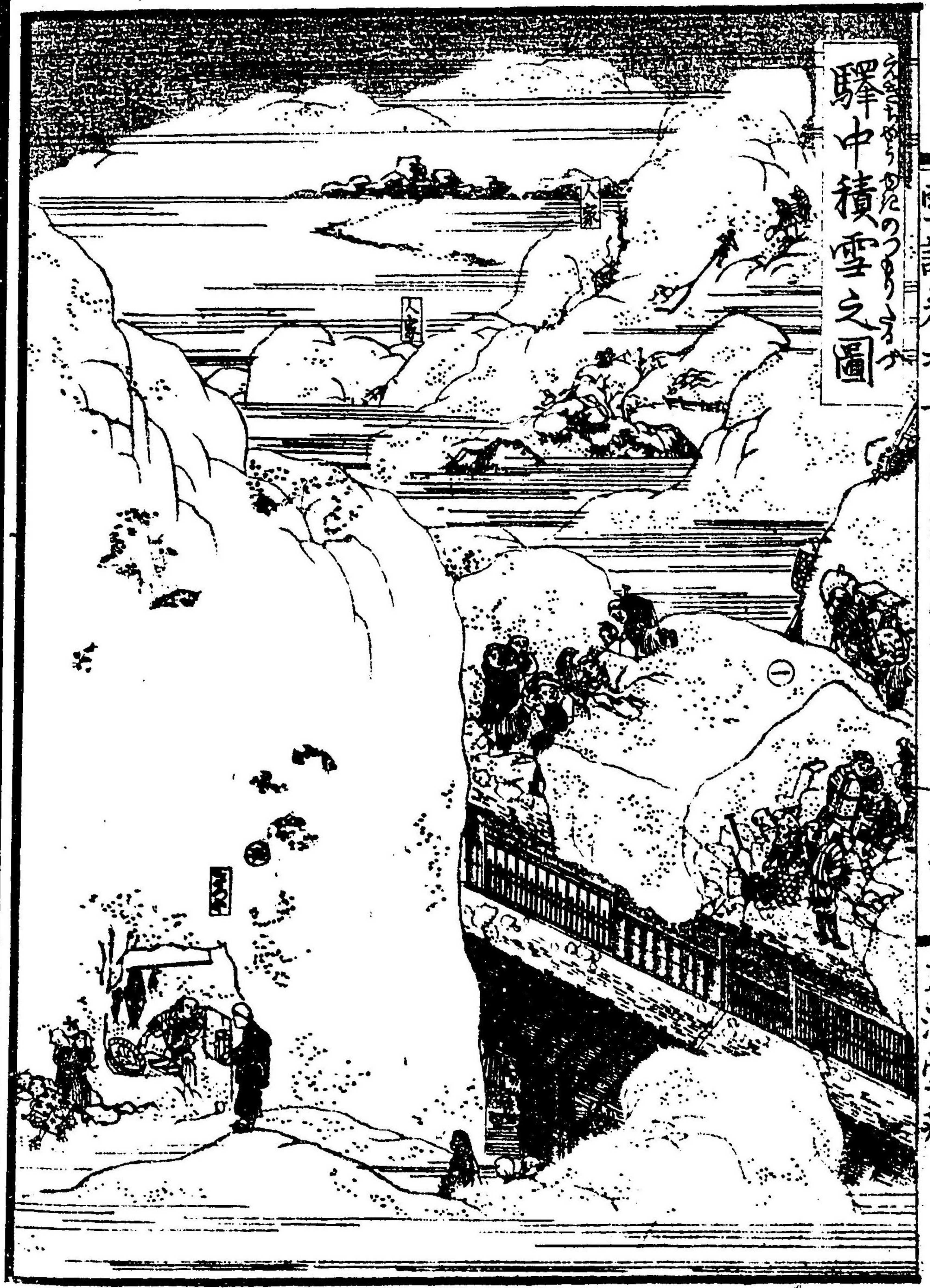
○ 沫雪

春の雪ハ消、
 国の、
 凍、
 雪を、
 悉く凍り、
 暖国の沫雪、

○ 雪道

冬の雪ハ脆、
 此時に里人、

驛中積雪之圖



理家大雪
幸慣習光
恨天梅柳
三年尽去
桑代傳好
鈴木收之題



京水筆

①人家の雪を掃る事本
文ありきと一②雪をわけて
御のいふかたの樹の雪を
雪をわけて物を置いとく
かたの③雪中の山のかた
野の雪あり

ゆゑ貧乏は旅人の道の道さひくまを待て空く時を移りあり健足の飛脚とりども
 雪途を行一日三里の過り極めて足自在なる雪路を越せぬと冬の中一
 の歎難と春の雪凍へ鍍石のていへる雪車又雪舟の字を以て重を乗せ里人の雪
 車小物をのせおのりて雪上を行舟のていへる雪車又雪舟の字を以て重を乗せ里人の雪
 雪車を用ふる春の雪中重を負へるも止馬小勝る雪車の制作別記を形大小雪国の便
 利第一の用具と云ふも雪凍りたる時おのりて用ひて一も里人雪舟途と
 唱ふ

○雪糞

凡雪九月末より降をりめて雪中の春を迎正三の月の雪尚深一三四の月お至りて
 次第小解五月おのりて雪全く消て夏道と云年の寒暖おのりて四五の月おのりて春の
 花お一時おひくく雪の中お在るも凡八月一年の間雪を看ざるも僅か四月
 月おまとも全く雪中お糞へ半年と云を以て家居の造りおのりて雪を御

くを専と一財を費力を及んずる紙筆お記して一農家おてて夏初より秋の
 末まで五穀を收るも雪中お稲を刈るも其たきりの千辛万苦暖国の農業お
 比お百倍と云ふも雪国の生る者お幼推より雪中お成長もゆゑ寒中のお草を
 七人の是と云ふも住バ都と云ふ花の江お奉公も一年のて後雪国の故郷お故
 る者お又十人お七人の胡馬北風お断き越島南枝お葉と云ふ故郷の志お世
 界の人情と云ふ雪中お廊下お雪毒をおかきお下雪吹をおかきお又
 てお雪を用ふる雪おる時お巻て明をさる雪下り盛る時お積る雪家を埋て雪と
 屋上お均く平おり明のていへる昼も暗夜のていへる燈火を照して家の内お夜
 昼をわくお漸雪の止る時お掃て僅かお窗をひき明をひく時お光明赫奕と云
 佛の国お生るも此外雪籠りの銀難と云ふも一一定るも雪中お籠り居て
 鳥獸お雪中お食元をとりて雪浅き国おまも一一定るも雪中お籠り居て

朝夕をるその人熊犬猫

○胎内潜

宿場と唱へ所の家の前を尻を長くのびて架る大小の人家をながめて雪の中は
 さうして平日も往來しては雪の中の街に用ひる如くは人家の雪をこみ積次
 第も重て両側の家の間が雪の塊を築く如くして於て母も雪の洞をひき尻より庇
 小通らして重言ふ胎内潜の又間夫と云ふ間夫は金掘の方言ひを借て用ひて
 御徒の本美の妻の 宿外の家が続る処に庇をひき高低をとりて雪の塊を往來
 奸淫するもの とも人の足立をば知らぬ一糸の道や園を春から雪堆き野の壇層を作りて通
 路の便と形画階のてし所の着て雪を登下する小脚を慣て一歩もあやまる
 他国の旅人さへ怖しく移歩せしめて落る者ありて雪の中身を埋む視る人ハ
 こまを笑ひ落るものいふを怒るか難所を作りて他国の旅客を勞ハしむる
 求る所為小ありて此雪を取除くもや人かと錢財とを費すもさす導ハ壇成

作りて途を問くとも初雪より歳を越る雪積まざるのみか細細細細記さる冊
 中へ冬一とてゆふの雪もあつて事甚多し

○雪中の洪水

大小の川も近き村里初雪の後洪水の災も苦むるありて洪水を此国の俚言も水
 揚とらふ余一年間との隣驛の親族油屋が家の上宿せし時頃十月の雪あり
 ゆく雪八九尺つもの雪をりて一夜半ありて近隣の諸人叫び呼びつて
 駭ぐまふ購を驚し何れやんと肩をこめて野に筒ををりてはる家の主兩
 て手小物を提水もつて一裏の掘揚(豆根)入りて持てる物を二階へ運びゆく
 勝手の方よりゆき家内の男女狂気のてし家財を水も流さどと
 て手當もいふ取退の水も低く随へていへば席を浸し庭も溢れ次第
 小積らる雪野とて雪のいへる雪光暗夜を照して水の流るものありて
 しるし余いふ助けし高野も逃登りて驛中を眺み提灯炬を燈し

大勢の男ども手く木鋤をくげ雪を越水を渉て声をおびくつふ末さるる
水揚せざる所の者どもつふ馳つて川筋を圍水と落せんたる間夜ゆく
まづつて女童の位呼ぶ声或は遠く或は近し聞よむこのものつて燃
残りたる炬火をなつて人も馬も首つけ水に浸り漲るるをわづらひ馬を助
んたる帯もせざる女片手小兒を脊負提灯を提て高処に逃のびる近けは
とてつあつて命をつつぐるを恥つてはかへつて可憐事
可憐事あり可憐事あり持てて筆も冬くつて東雲の頃小至り
て水も落りて諸人安堵のあひをさるぬ〇とて我郷雲中の洪水大く
初冬と仲春とふり此間との驛は左右人家の前小道づの流あり末は魚野川へ
落る三伏の早ゆも乾くゆり清流水もあふ家毎此流を以て井水の代り
あつて桶ゆも汲た流るるを平日の便利井とすも勝りたる初雲の
後十月のころまふあの一の二條の小流雪の爲に降埋りて流水ハ雪の下あり故

小家毎に汲き程小雪を穿て水用を弁すこの穿る所も一夜の雪小埋らつて
あまを再々つるり屢なり人家小ちた流さかぬのでつるる二條の流の
水源も雪小埋と水用を失ふのなる水あがりの懼あるゆゑ所の人力を併て流
のかり口の雪を穿るゆりささども人毎小業用小さくつて時を失ふ又ハ一夜の大
雪ふかの水源を塞ぐ時ハ水溢て低所を尋て流る驛中ハ人の往來の爲小雪を踏
へて低ゆる流水漲り来り猶も溢て人家小入り水難小逢るる前ふりつて
幾百人の力を尽して水道をひらきささども家財を流し或ハ溺死小あつてもあり
仲春の頃の洪水ハ大くハ春の彼岸前後之雪も消去山ハささく田圃も湧
る曠平の雪面も枝川ハ雪小埋と水ハ雪の下を流と大河とりども冬の初より
岸の水まづ氷りて氷の上小雪をつりせつる雪もあつて氷りて岩のこく岸の
氷りたる端次第小雪ありつりりらる兩岸の雪相合へて陸地とあつて雪の地と
つるさつて春を迎へて寒気次第小ぬるるその年の暖気つて雪も降上る二月



雲中洪水之圖

浮世草子

文樂堂藏



京水奉

浮世草子

十二

文樂堂藏

の頃水気ハ地気よりも寒暖を知る事なきものゆゑか氷面ハ積りたる雪下より解き凍りたる雪の力も水みちらゆる弱くあり流ハ雪ハ寒まて狭くありたるゆゑ水勢ますます烈しく陽氣を得ず雪の軟る下を滑り墜のきまらざる墜みりハ寝耳ハ水の災難ハあつた雪中の洪水寒国の艱難暖地の人情多し右ハ其一をりこの雪中の洪水地勢ハより種々あり詳ハ舟楫より

○熊捕

越後の西北ハ大洋ハ對して高山あり東南ハ連山巍々として越中上信奥羽の五ヶ国ハ跨り重岳高嶺肩を並ぶ数十里をるはゆゑ大小の獣甚多し此獣雪化遊々他国へ去るもありささづるもの動むて雪中ハ穴居するハ熊のハ熊膽ハ越後を上品と云雪中の熊膽ハと云ふ價貴し其重價を得んと欲して春暖を得て雪の降止るころ出羽ありの脯師ども五七人心を合せ三四疋の猛犬を牽き米と塩と鍋を貯水と薪ハ山中在るハ随々用をさし山より山を越登ハ獵して獸を食

と一夜ハ樹根若草を寝所とす生木を焼て寒を凌且明とす着るもゆるく寝即をり頭より足みゆるまて身を着る物悉く獸の皮をとりてこれを作る遠く視るハ猿ハ一頭ハ人地金華を衽ゆとハかゝる人をやいふは此者ハ志野ハ我國の熊ハあつた我山中ハ入り場野ハまを見え木の枝藤藁を以て假ハ小屋を作りてこれを居野とすこのくハ犬を牽四方ハ別々熊を寝ハ熊の穴居する野を認ハ目職とのくハ小屋ハより一連の力を得ててこれを捕るその道具ハ柄の長さ四尺半りの手鎗或ハ山刀を鎌刀のごとくハ作りたるもの鑊炮山刀斧の類ハ刀鈍時ハ野ハと砥をとりて自研ハ此道具も獸の皮を以て鞆とすハ此者ハ春暖もかきし今冬より山ハ入るをりもあり

そもく熊ハ和歌の王猛く一義を知ら菓木の皮虫のものを食として同類の獸を喰ハ田圃を荒ハ稀ハ荒ハ食の足らざる時ハ詩經ハ男子の祥と一或ハ六雄將軍の名を得たる義獸ハまはるるハ夏ハ食をとりてハの外山嶽を穿中ハ小探者冬

の威勢を以て之を捕く飢を凌ぐ北杜同く穴小籠り北の子の八子と
トくこの其威勢を以て野の大木の雪類に倒ると朽たる洞（下木の根）又ハ岩間土
穴（土の穴）心小随（心）居る処（居る）とありて雪中の熊ハ右のごとく他食を求むるゆゑその
膽（胆）の良功ありて夏の膽ハ比（比）五六倍之我國ゆへハ鉛膽・琥珀膽・黒膽と唱へ色を
あつて之をとりて琥珀を上品と黒膽を下品と偽物ハ黒膽ハ多し

●さて熊を捕く種々の術ありかゝる居所の地理もあつて捕得べきは術をわきま
熊ハ秋の土用より穴入り春の土用穴入り出るとの又二説ハ穴入りてより穴を
あつてまぐ一膳小籠りとの入りの視ざるとうらまれば信（信）トサレ

沫雪の條ゆりへるごとく冬の雲ハ軟ゆる足場めたも及熊を捕ハ雪の凍る春
の土用よりまぐ穴よりりせんとも顔（顔）を程（程）時節ともさへ岩登の裾又ハ大樹の根
るごとく威勢を以て捕くハ崖（崖）の術を用ふ天井釣（天井釣）ともいふその制作ハ木の枝藤の
蔓（蔓）ゆり穴小倚掛（倚掛）と棚を作りたるの端ハ地付（地付）杭（杭）を以て之を傳りたるもの

横木の柱ありて棚の上ハ大石を積むと横木より繩を下し繩ハ輪（輪）を結びて

穴小籠り（穴小籠り）とまを蹴綱（蹴綱）とらハ此蹴綱ハ轉機あり全（全）く作りたるものも穴小籠りのごとく
で玉蜀烟草（玉蜀烟草）の葉（葉）の多る熊の憑（憑）む物を焚（焚）まき入り小籠り（小籠り）と棚を穴小籠り（小籠り）と熊棚（熊棚）ハ
噴く大ハ怒り穴を飛出する時かゝる穴の蹴綱ハ籠り（籠り）と轉機（轉機）と棚落（棚落）て熊大石

の下ハ死（死）を手を下（手）さし熊を捕の上（上）術ハ是ハ熊の居所（居所）とてさしハ樵夫（樵夫）と
折（折）ゆりてハさるる事

又熊捕の場敷を踏（踏）る剛勇（剛勇）の者ハ一連の櫛師（櫛師）を熊の居る穴の前（前）ハ待せ己一人
ひり（ひり）藁（藁）を頭（頭）より被り（被り）ひりハ山ハ火の州（州）の者（者）のハ作（作）らる穴（穴）と入り熊ハ
藁の毛を觸（觸）むハ熊ハその毛を嫌（嫌）むるのゆゑ除（除）て前（前）ハさし又後（後）よりその毛を障（障）す

熊又ハふさむ又さしり又まんぐ熊終（終）む穴の口ハゆることを見と待（待）かまふ
櫛師（櫛師）とも手練（手練）の鎌（鎌）炎（炎）ふりて突（突）當（當）一鎗夫（鎗夫）とさし熊の一揆（一揆）ハ一命を失ふその危（危）を
踏（踏）ぐ熊を捕ハ僅（僅）の黄金（黄金）の爲（爲）ハ金慾（金慾）の人を過（過）る色慾（色慾）より甚（甚）トさるる黄金ハ

道き以て得る。道き以て得る。

又上は獲る所ありてその下は雪の窟の窟なるを知らず穴を掘りて獲るものなり
とてふも雪三五天の吹積る熊の窟あり所の雪ありて穴を掘りて獲るものなり
熊の窟の窟なるを雪の窟の窟なるを知らず穴を掘りて獲るものなり
木の枝柴のものを穴に挿入して熊を誘ひて穴に入るかきつるものなり
穴通して熊の窟の口よりづき時餘ふかきつる穴の窟なるを知らず穴を掘りて獲るものなり
て書つて犬人をかきつる穴の窟なるを知らず穴を掘りて獲るものなり

○白熊

熊の窟の雪の白くして天然の常なるものなり天公機を轉して白熊を出せり
○天保三年辰の春我々住奥沼郡の内浦佐宿の在大倉村の樵夫八海山ふ入り
時りてふく白き兎熊を獲り世に珍しく飼ひてふ香臭師師の古風なるものなり

て買ひて市場又は祭礼まで人の群る所にて看物みせしものなり
余もつるふ大さ物のところから余く熊ふく白毛雪を敷き置くと光澤ありて
天竺織のごとく眼と爪は紅くして人小則して愛するものなり
あるはかその終をきくべ白鳥の改元白鳥の神瑞八幡の鳩源家の旗まで
白き皇国の祥象の天機白熊をいふも昇平万歳の吉瑞なり
山家の人の話に熊を殺して三三足或は半年歴する熊一足を殺し其山を
と荒るるあり山家の人々を熊虎とのあつたふ山家の農夫の窟に熊
を捕りてその窟に熊の窟の窟なるを知らず穴を掘りて獲るものなり

○熊人を助

入熊の窟に隠れて熊を助らるるものなり
る人の語りて珍しく記す○余若くして時妻有の庄内奥沼郡
用ありて西三河留せし事ありて頃夏よりて多客舎の庭の木にげふ

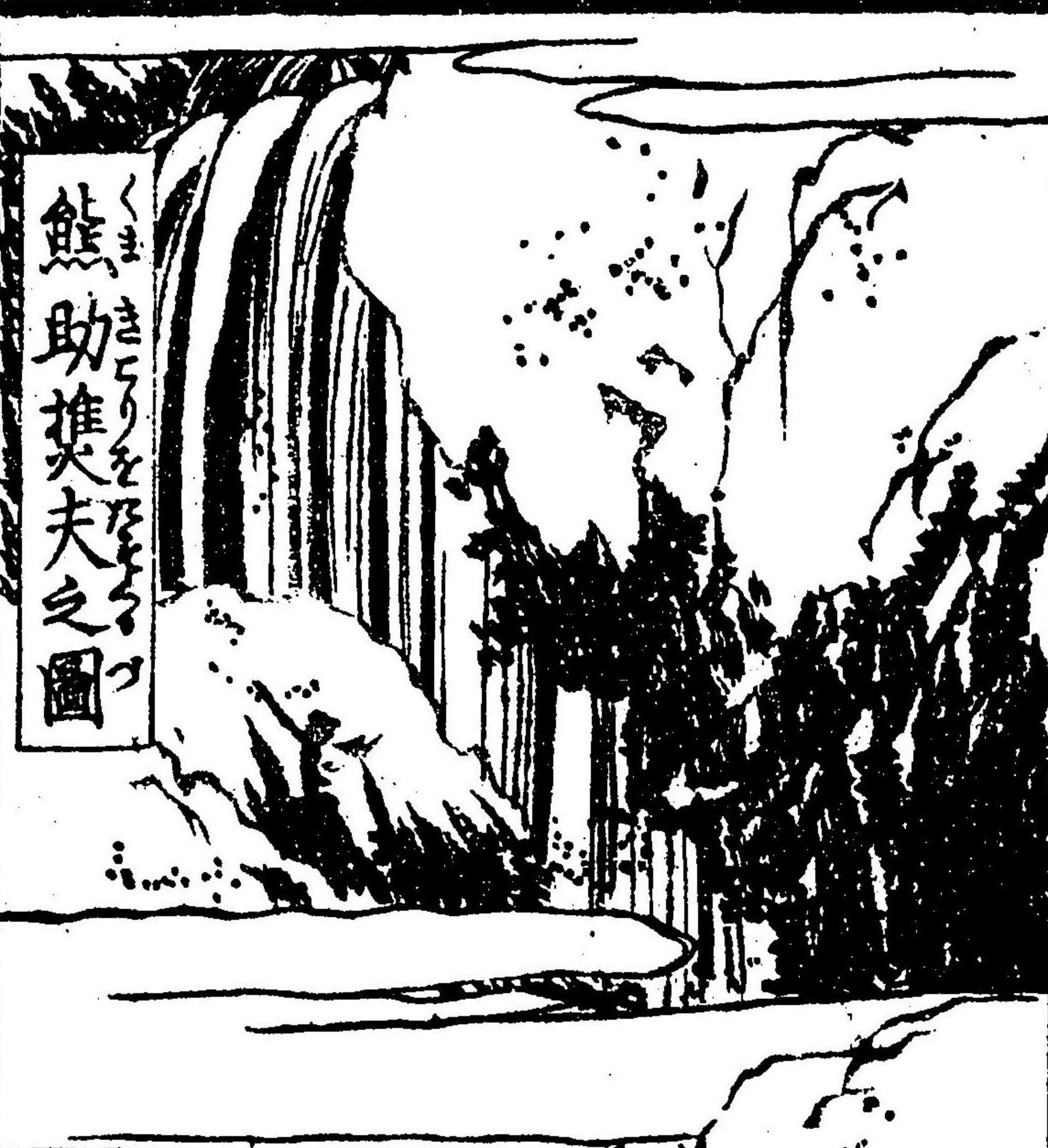
建さきつゝ納涼亭へ主人の酒を好む人ゆへ酒肴をさへお開の余の酒を
嗜むるゆゑ茶を喫う居りし一老夫たふ来り主人を親へ拱手で礼をよ
後園(行ん)とを主呼とあり老夫を指しり此油火の社年時熊小助らぬ
る人へ危き命をなまより今年八月十二日で健ふ長生を可賀老人と識面
ありゆゑの老夫完満とて再茶んと余よびゆめ熊小助らまゝと珍
説く語りて聞せぬといひし主人余ヶ前ふ在り茶盤をとりて一盃喫て
酒を満盃といひしゆゑ老夫庭の端に坐り酒を視て笑をふと続て三盃を
喫て古鼓して大い喜びさへ語説ゆせん我廿歳二月のそよめ新をさへんと
雪車を引て山へ入りし村のつらね所の能代つて一へ入るゆゑは場わ
ゆゑ山一重踰りしゆゑ新とて茶のまゝありゆゑ自在に伐とり雪車可
うひりゆゑ徐々東雪車積り縛つけ山刀をさへし低く随へ今来りし
方へ来下りしゆゑ一束の柴雪車より轉び落谷を埋る雪の裂隙ふたをり

凍りし雪陽氣を掃く なるゆゑ捨て飯も惜まらばその野ふりし柴の枝小
裂きゆり帯て 手をとりけり引上んとせらるるふせりも 動も落る勢ふ撞らるるゆゑんさへ重
くより引上んと 匆匆とて双手を延べ一歩けり上んとせらるる時足小踏力
のたゆまぬのまじりゆゑんさへ 躰を轉倒雪の裂隙より遙の谷底へ墜けるか
雪の上を薄落るるゆゑ幸ふぬけゆゑんさへ 一歩のやうくふ心付
上をさへ雪の屏風を建てるごとく今ゆゑ雪類やせんと下ふまゝ
生る心地は多く暗くゆゑんさへ 明方ふりせんと雪小埋るる狭谷間をつゑ
やうくふへて空を見し野ふりしゆゑんさへ 谷底の雪中寒烈し手足も龜手
一歩もさへびざりて凍死へし心を励み猶途もあると百歩をさへり行
ゆゑんさへ 遠める野ふりしゆゑんさへ 四方をさへるる谷間の途極やう瘴氣落るる鼠のごとく
ゆゑんさへ せんまゝの惘然とて一へ入るゆゑんさへ 思案をさへ出たりたを
是より熊の詰今一盃をいひて自動てゆゑんさへ 突腰より烟斗を

岩窟雜事圖



茶室



熊助推夫之圖



收之草

可愛りの〜と語り〜主人は微酔を老夫おむひ其態は北態でいふ〜
 人大ひ可笑ひ又酒をのませ盃の軟弱ふ〜と語り〜下回さなつ〜
 老夫曰人の心は物か〜と〜の〜熊の終〜時〜死地〜覚悟を
 さいの命も惜〜と〜熊が助ら〜と〜命を〜助る人〜
 雪の消〜本根岩角の鏡〜と宿〜と雪の〜と〜
 谷間の雪の〜里〜の〜日〜の〜
 日の〜所〜を〜時〜熊〜の〜
 何方〜と〜又〜を〜人の足跡の〜所〜の〜熊〜
 顔〜走り〜行方〜を〜我を〜と熊の〜方を〜
 の〜神佛の御姿〜と〜伊勢の〜光寺〜と〜道持〜と〜足

踏所も〜火點頃宿〜の〜人〜と〜念仏〜と〜
 も〜愕然せ〜と〜幽霊の〜と〜月代の〜の〜
 の〜小瘦〜の〜幽霊〜と〜の〜
 薪〜の〜甲九日目の持夜〜と〜
 仔細小語り〜九重門〜と〜
 て語り〜を記〜と〜今〜と〜

○雪中の奥

唐土蜀の峨眉山〜夏〜積雪の〜其雪の中〜雪組と〜山海経〜
 雪消終〜消終〜始終の死生を雪と〜字各を〜
 雪組の〜類人〜と〜峰の〜雪組の〜
 雪中の組鳩也木火土金水の五行中皆を〜木〜の〜水〜の〜常〜見る所〜

ら〜〜〜地は天の星と灰の煙末とをまじりて焼く火の炎を殺して形のもの灰中
 ありては種々又人の熱より生じ熱火の炎より生じても地も雲も共く暖まる所
 ありては金中の肉取ふかきとて其の煙のてんたもあつて人々を苦しめたる銅鑊の腐
 らぬも其の生きたるの半の形を賣りて〜〜〜其の所産を鑄
 鑄の始鏝の中なるは虫の肉取ふかきとて人々を苦しめたる銅鑊の腐
 らぬも其の生きたるの半の形を賣りて〜〜〜其の所産を鑄
 らぬも其の生きたるの半の形を賣りて〜〜〜其の所産を鑄
 らぬも其の生きたるの半の形を賣りて〜〜〜其の所産を鑄
 らぬも其の生きたるの半の形を賣りて〜〜〜其の所産を鑄
 らぬも其の生きたるの半の形を賣りて〜〜〜其の所産を鑄



人を驚かすに用ひたるを驗微鏡にて
 視る所をこつ小圓く物産家の
 説を俟つ

雪吹

雪吹ハ樹をこし横りたる雪の風散乱はるをいふ其状優美のゆゑ花のりを
 是れ比して花雪吹といひて古哥ゆゑあり是れ東南す雪の国のゆゑ
 北方文雪の国哉越後の雪深と云ふの雪吹ハ雪中の暴風雪を巻騰騰之雪中第一
 の難義と云ふなり死する人年々と云ふを奉てその記す雪の雪吹のやうに
 觀人の為小文雪の雪吹の愕胎を示す
 余が住椋澤小遠りたる村の農夫男一人あり其貌小く善親小仕ふ廿二歳の冬
 二里あまり隔たる村より十九歳の娘をむく小容姿憎くば生質柔従りて糸織
 の伎も伶俐と云ふ男姑も可愛がり夫婦の中も睦く家内可親春をむく其年
 九月の七日安産して是れ男子なりと云ふ掌中小珠を得る心地ゆく家内
 悦びいと産婦も健小肥乳汁も一子小餘るなりと云ふ小兒も肥太り可賀名を
 つけり十歳を壽けり此一家の若ま〜〜〜篤実と云ふ耕作を勤行小農夫と云ふ

も貧くは善男をもち良娘をもち好孫をまうけりて一村の人常不羨多
 かも善人の家小天災を下り如何ぞや○かく産後日を歴てのち連日の雪
 も降止天气穏る日娘夫小むひ今日親里へ行んともいひゆやせんといふ男
 旁小あてていよたる男も行て実母も孫を又せりていふせ夫婦も自
 慢せりといふ娘もいふもつと姑小かくといひ姑小俄小土産をど取ろうと問小娘
 髪をゆひるごとく皆の衣類を着し綿入の木綿帽子も寒国の習とて見小く
 くは児を懐小ひた入んとする小姑身よりよく乳を吞せりていふ途小
 て小秘小秘のこもくくると一言の詞も孫を愛も情もあはるる夫ハ兼笠
 搦脚衣も心を通晴天 兼笠を着し 雪中 農夫の帯土産物を輕荷小擔ひ兩親小暇ををり
 夫婦袂をつら小喜躍て出たり 正是親子が一世の別也後の悲難ははりの
 けり○さるやど小夫ハ先小立妻ハ後小あかひやくとつまふり今日八頃目の
 目扣よりとてかひいりて今日夫婦孫をつとて来りて一と親よりいふ

と玉ふす一孫の顔を見玉るさるりていふあかんとさるりていふ父翁いひ
 ちや来りて一が女人いひも赤子を見ぬいづるゆゑとてこの喜悅あらん逢
 るる一痛てもよりんや郎も痛め不可也二人とまりて兩親米ぬんこは
 飯一とどまるとの間兒の啼小乳房をませつらつとて道をいそだ美佐場と
 い原中小到一時天色倏急小霞り黒雲空小覆ひけり是雪中 夫空を見
 大の驚怖ハ雪吹ぬんいひいせんと跟跡うち暴風雪を吹散す巨濤の岩を越
 るるごとくつら脱雲を卷騰て白竜峯小登がごとく朗るりて雪をくもごとく天
 怒地狂寒風ハ肌を貫の鎗凍雪ハ身を射の箭之夫ハ兼笠を吹とて妻ハ帽子を
 吹ちぎつと髪も吹とて吐唾といひ問小眼小襟袖はさる福も雪を吹いと全
 身凍呼吸迫り半身ハ已小雪小埋りらるる命のきりるる夫婦をわけ
 わつとと哭叫ども往果の人もろく人家中も遠けとて助る人もく手足凍て
 枯木のごとく暴風小吹僵と夫婦頭を並て雪中小倒と死けり此雪吹其日の

暮小止次日晴天ありけり近村の者五人此所を通りかりふの死骸ハ雪吹
 小埋りきくをえんがごとく赤子の啼声を雪の中ふまけき人々大不怪を以て
 逃んとするも在り剛気の者雪を搦くふまけ女の髪の毛雪中小頭より扱ハ
 昨日の雪吹倒さるる里言ふと皆のつらき雪を搦死骸を見るふ夫婦手を引
 むひく死居り兒ハ母の懐あり母の袖兒の頭を覆ひて見ハ身小雪を
 解さぬゆゑ凍死せ兩親の死骸の中ゆき又言をあげてふまけり雪中の死
 骸の生るごとく見知る者あり夫婦のつらき事あり我兒を引りて
 袖をわひ夫婦手ををるるふまけ死す心のうちかひやまてままの若者り
 も泪をわき見ハ懐あり死骸ハ黄ふつと夫の家小荷ひぬらりうの兩親ハ
 夫婦娘の家小一宿とのこもひをりふ死骸ををて一言の詞もく二人ケ死
 骸ふらり死顔ふくわをかゝりて大声をあげて哭たりるも憐のありさぬ一人
 の男懐より兒をいひて姑ふもてけき悲と喜と兩行の涙をわきりける

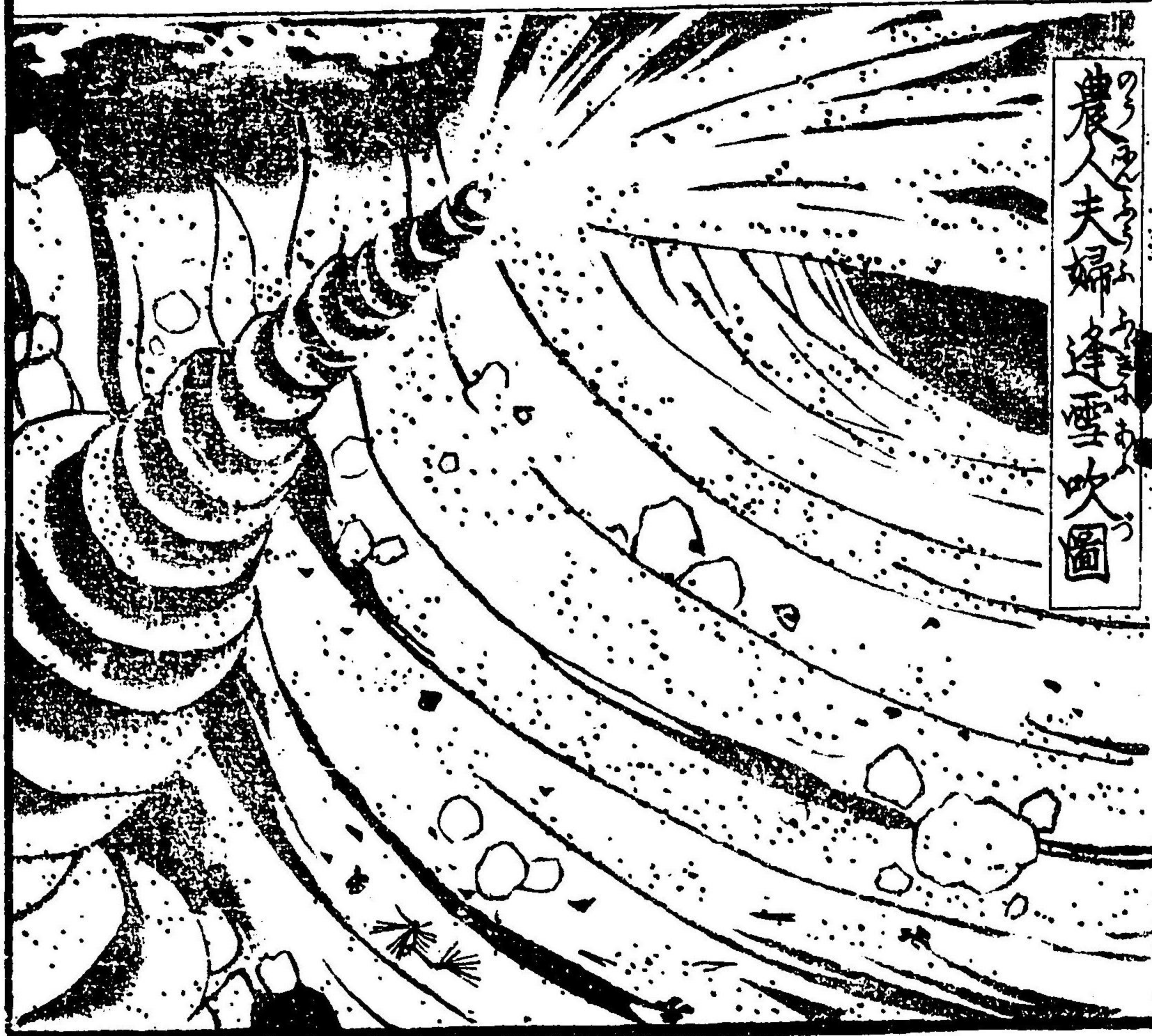
△里言ふ雪吹をきくといふ里言ふ

とぞ
 雪吹の人を殺さるり大方右小類も暖地の人花の散ふ比く美賞する雪吹と
 其異こと潮干小遊びく樂と洪濤小溺て苦との如く雪国の難美暖地の人
 かのひをるる連日の晴天も一時小夜く雪吹とあり雪中の常々其力樹を
 扱屋を折人家こまけ為小苦むゆ枝拳ぐり雪吹小逢る時ハ雪を搦身を
 其内小埋きハ雪暫時ふつり雪中ハくつて温まる気味あり且氣息を漏り
 死をまぬぐるゆあり雪中を歩くる人陰囊を綿ゆつてゆきまをせざれ
 ハ陰囊まづ凍て精気尽る又凍死するを湯火をのりて温まバ助るゆあまど
 も武火熱湯を用ふるる命をまけりるのち春暖ふらむ腫病とあり
 良医も治りて凍死するはまづ塩を熱て布小包きく膝をあてり搗火
 の弱をのりて次第小温づり助りるのち病を發せば人肌を温む手足の
 凍るも強き湯火をあてむる陽氣のこき灼傷のごとく腫つひ小腐

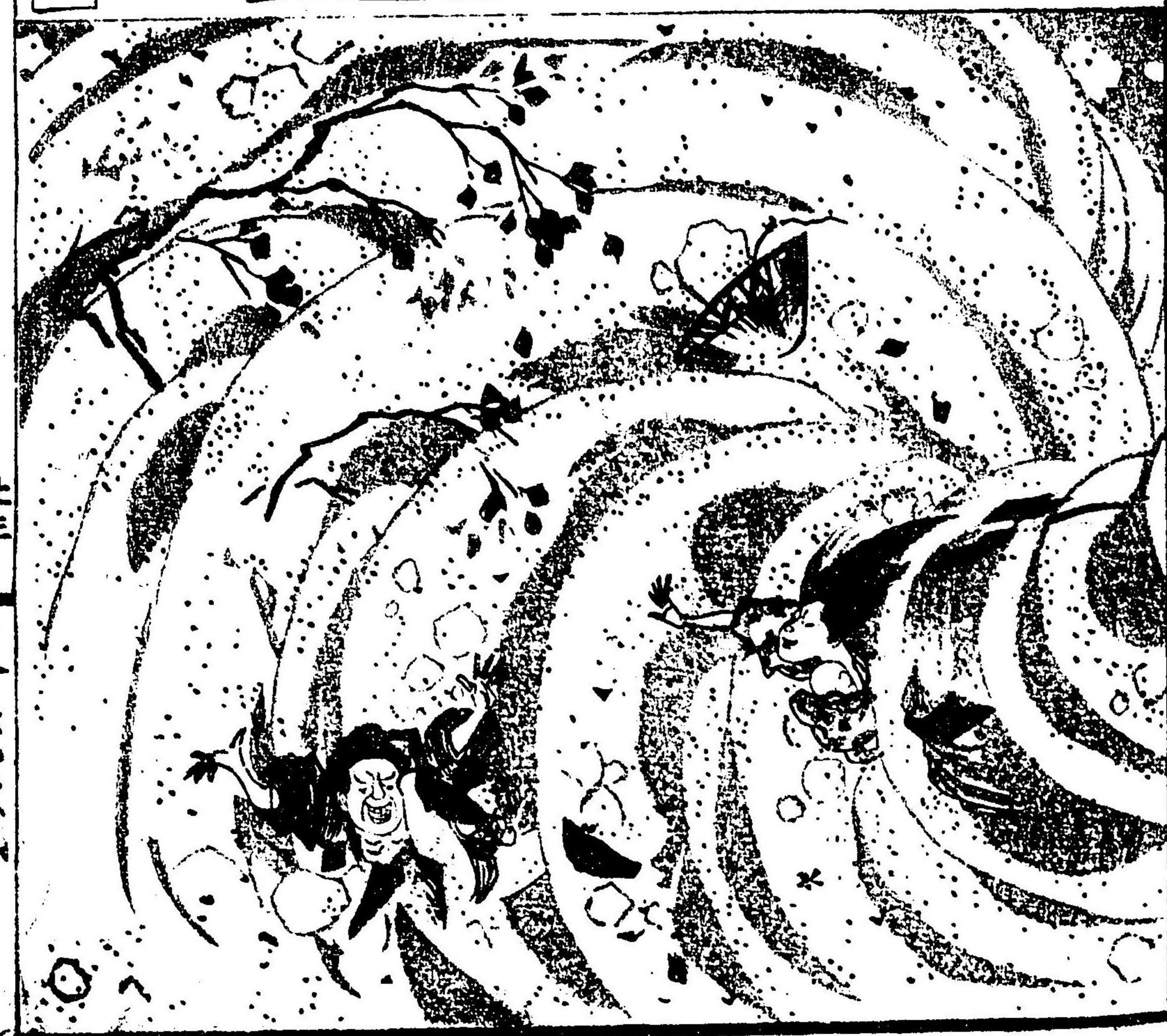
雪中捕熊圖



農人夫婦逢雪吹圖



京水筆



て指をかきも百薬功ありて是れ我が見る所を記し人示も人の凍死も
 手足の龜手も陰毒の血脈を塞ぐの候も湯火の熱を以て温むる人精の氣
 血をなほけ陰毒一旦の解るるといふも全く去れ陰ハ陽ハ勝ざるを以て陽氣
 至ハ陰毒肉小量て膚ハ寒中兩雪歩行て冷する人急ハ湯火を用ふるに
 己ハ人熱の温るるもをまづて用ふる長生の一術なり

○雪中の火

世ハ越後の七不思議と称する其一ハ備原郡妙法寺村の農家炉中の隅
 石臼の孔より出る火人皆奇とて口碑ふつて諸書ハ散見也此火寛文
 中始て出ると日記ハ又えいざ三百余年の今ハかりて絶るゆゑ奇中の
 奇ハ天奇を出さるる一奇ハびらり國の奥沼郡ハ又一の奇火を出せり天
 公の機状の妙法寺村の火とあるとて彼ハ人の知る所是ハ他國の人の志
 らざる所なりとて記し話柄とす

越後の国魚沼郡五日町との驛ハ近き西の方ハ低き山あり山の裾ハ小溝在
 天明年中二月の頃ハ雨なりとて小童ハ遊びてあるとて其の戯をて遊倦
 木の枝をわづめ火を焚くありとて其所より火をとりて別ハ火
 燄と燃わたりけり見覺大ハおとどけ四方ハ逃散けりその中ハ一人の童
 家ハくの事の仔細を親ハ語るる此親ハある者もてその所ハいなり火の形
 状をえりしとて消るる雪中ハ手を入るべしとてその孔をり孔より三四寸の
 上の火燃る熱覺ありとて是年ハ妙法寺村の火のなるとて火口ハ石
 を入して火を消し家ハくの火ハおとどけ再その所ハいなりとて
 る火ののえりしとて小溝の岸ハ火燄をりて幾燄ハ火をとりて試ハ池中ハ枝
 りとて池中ハ火を出せりとて庭燎ののどハ水上ハ火燃るハ妙法寺村の火ハ
 りも奇とて驛中の人ハ来りて火を視るるとして錢ハ才入ハ池のやと
 りハ濕屋をつくり竹篔を以て水をとりてとて池中の火を引き湯槽の電

不燃一又燈火中も代る池中の水を湯不煙一價を以て浴せしむ此湯硫黄の
 気ありて能病瘳の類を治一^{一時流行して}人群をなせり○按小地中水
 脈と火脈とあり地ハ大陰多る由多水脈ハ九分火脈ハ一分なりかゝる由多水脈ハ
 甚稀之^{甚稀}地中の火脈凝結とありわづらば^い氣息を^あせり^あ人^あの^あ氣息の^あごとく^あ即
 眼^あハ^あ又^あえ^あび^あ火^あ脈^あの^あ氣息^あハ^あ人間^あ日用^あの^あ陽^あ火^あを^あ加^あへ^あば^あと^あて^あ燭^あを^ある^あと^あを
 陰^あ火^あと^あい^あ寒^あ火^あと^あい^あ寒^あ火^あを^あ引^あ不^あ算^あの^あ筒^あの^あ焦^あぎ^あハ^あ火^あ脈^あの^あ氣^あハ^あと^あ陽^あ火^あを
 うけ^あて^あ火^あと^あさ^ある^ある^あ氣^あ息^あを^あり^あの^ある^あ由^あ多^あと^あ陽^あ火^あを^あう^あま^あび^あ筒^あの^あ口^あより^あ二三寸^あの上
 小^あ火^あを^ある^あと^あを^あ以^あて^あ火^あ脈^あの^あ氣息^あの^あ燃^ある^あを^あ知^ある^あと^あ妙^あ法^あ寺^あ村^あの^あ火^あも^あ是^あと^あ是^あ
 余^あが^あ發明^あハ^あら^あば^あ古^あ書^あハ^あ據^あて^あ考^あ得^ある^あ所^あと^あ

○破目山

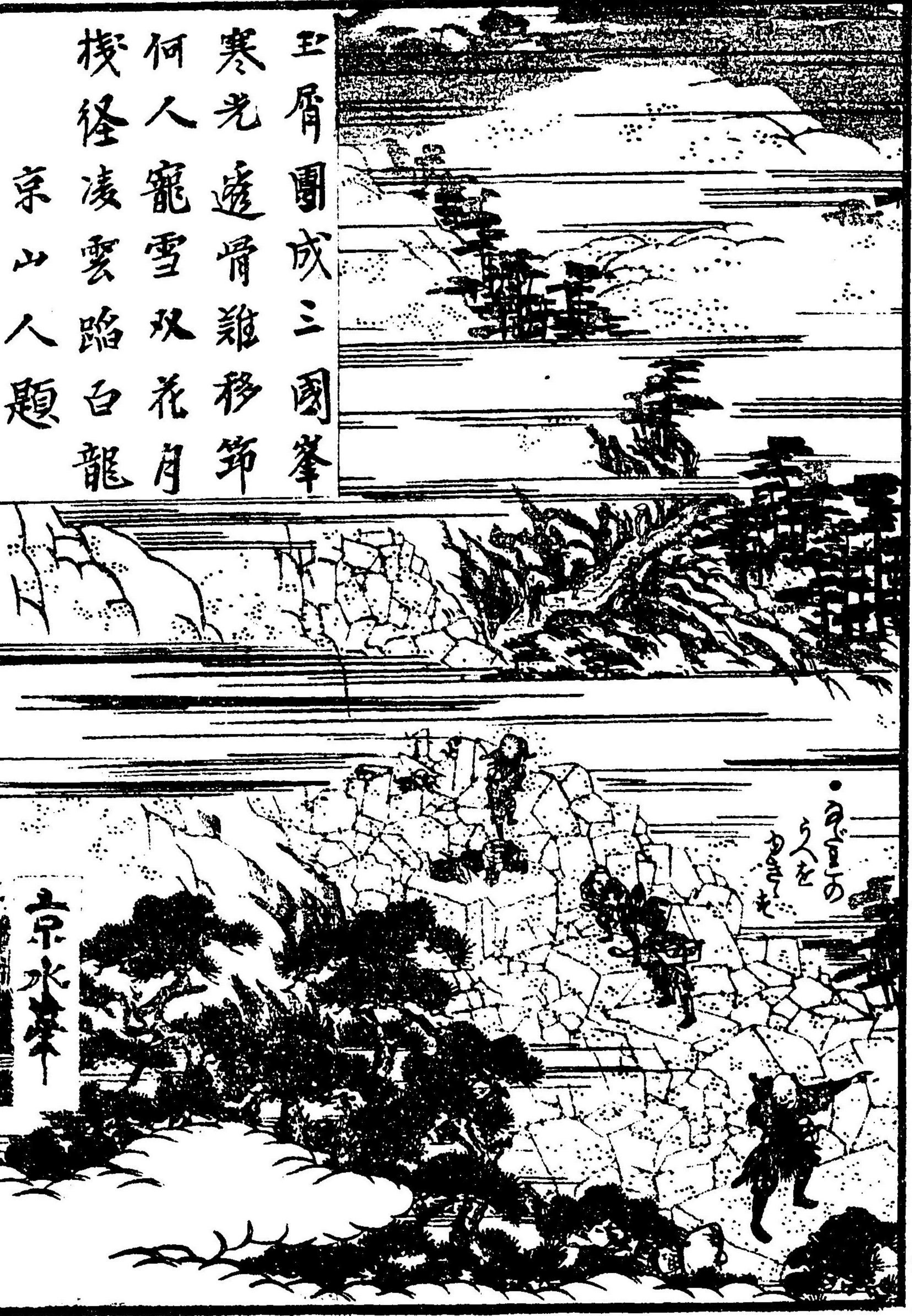
魚沼郡清水村の奥小山あり高を二里ありの周圍を二里ありの山中を二
 大小の破隙あるを以て山の名とて山半ハ老樹條をつつ糸半より上の岩石

疊とて其形音響虎怒とて奇怪と言つて守藤の左右ハ溪川あり谷ハ
 滝をるる絶景又言つて早の時に滝壺ハ雪をまぶらるるに驗あり二年四月の
 半雪の消る頃清水村の農夫ら二十人あり集り熊を狩んとて此山のむら
 の破隙の窟をるる所より熊の住處ありんと例の番椒烟草の莖を薪ハ
 交窟のどんで焚くといふ熊ハさう出で窟の深由多ハ烟の奥ハ至るるんと
 次日ハ薪を増し山も焼よと焚くといふ熊ハさうぞと一山の破隙ハかたより烟をい
 ぐと雪の起ぐ如くありけむり奇異のありきを一熊を狩ると一窟ハくまら
 清水村の農夫諸のいかにいふ此山半より上の岩を骨とて肉の土薄く地球
 氣を通じて破隙をるるや天地妙くの奇工思量とらむ

○雪類

山より雪の崩類を里言ふは雪崩なり又山より雪の崩下るるを雪崩と
 りハ俗用して山崩なりといふ雪類の字を借り用ふ字書ハ類ハ暴風

三國嶺雪顏の上往來の圖



玉屑團成三國峯
寒光透骨難移節
何人寵雪双花月
棧徑凌雲踏白龍
京山人題

三國嶺
雪顏の上

京水峯

ともも深く凍るも又里下り其甚し我國東南の山に里ふちらぬ雪一丈四五尺な
 る浅し此雪のりて岩のてらるるもの二月のころふら陽気地中より
 蒸く解んし時地氣と天氣との為ふ破て響をりて一片破て片破る其ひま
 大木を折ぐて一し雪類の崩れ山の地勢と日の照きとふりてな
 だう処とるまざる処ありなるるる二月ふちの里入しその時をあり処を
 あり崩を知るもあふるるの掃くまざる天の氣候不意
 ゆて一定の雪類の下ふ身を粉ふ碎まあり雪類の形勢のりてなるる
 らるる雪の凍るる大より十間以上小るるも九尺五尺ふあまる大小数百
 千悉く方をりて削りてなるるるる下ふ舟をりて幾千丈の山の
 上より一度崩れたるその響百千の雷をりて大木を折大石を倒れ此時にか
 らるる暴風力をとり粉ふ碎る沙砾のごとく雪を飛せ向日も暗夜の如く

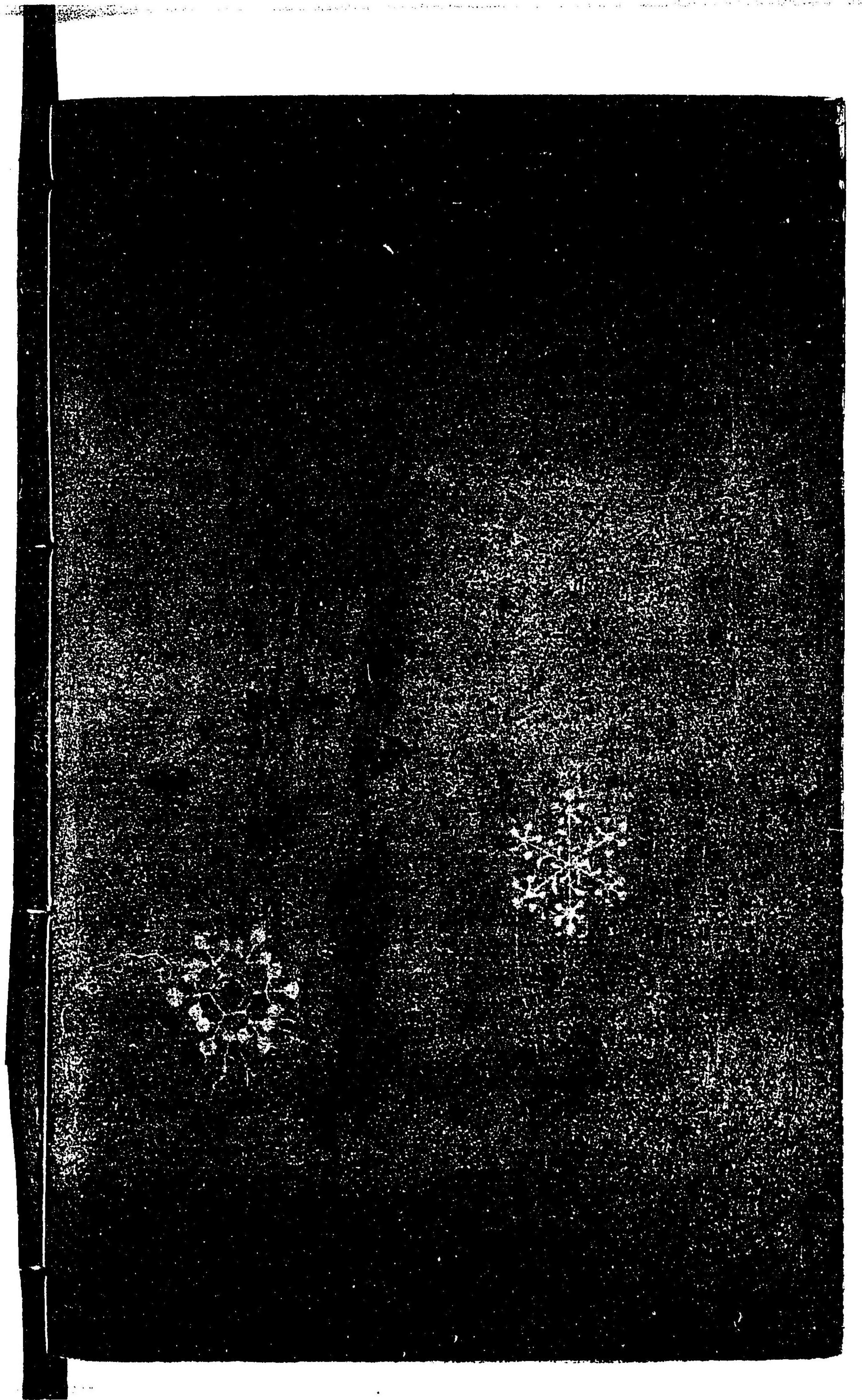
その標しなるる雪類の命を捨る人命を捨る人我が
 見聞しるを次の巻に記して暖国の人の話柄とす

或人問曰雪の形六出する前ふ舟ありて詳し雪類の雪の塊るるん碎る
 形雪の六出する本形をりて方形いん答て曰地氣天の實格
 て雪なるも多天の四の地のがるるを併合て六出する六出の四形の
 裏に雪天陽を離て降下り地ふ飯に天陽の四の家をりて地陰の方より
 本形の家をりて雪類ハ千も万も主南のりて解るるる角
 四くするも多天の四の地のがるるも多天の四のりて陰中ふ陽を包て
 陽中ふ陰を抱て天地定理中の定格と老子經第四十二章曰萬物負
 陰而抱陽沖氣以為和のりて此理を以てする時ハ内美さぬりて
 内美さぬりて陰中ふ陽を抱てて天理の叶をりて夫ふ代りて理屈
 をしるるる家内海をりて理屈の過地鳥且をりてなるるる

V
139
7
146

又家内の陰陽前後して天理の違ふ家家の七の萬物の天
理証へんがなりかんのひんがの同家唯くとへ本の雪親
悉く方形のまよもひんがの十の七の方形をうへるは故
小此説を下せり雪親の圖多く方形ふんがのの其七のて換
様を為そのと

北越雪譜初編卷之上終



139
146

東京圖書館
和書門
地理類
二架
一函
一四六號
七册

027404-001-3

139-146

北越雪譜

鈴木 牧之 / 著

〔刊年不明〕

ADJ-0175

